

尊念和尚

問答記



須長英男 著

---

# 尊念和尚問答記

(Web 版 第 1 . 1 版)

須長 英男

---

## 《注意事項》

本著作物は、著作権者の許諾を得ることなく自由に、複製し又は口述し、それらを公衆送信し又は無償で頒布することができる。

また、本著作物は、著作権者の許諾を得ることなく自由に、翻訳し、それを複製し又は口述し、それらを公衆送信し又は頒布することができる。

ただし、本著作物及びその翻訳物は、著作権者の許諾を得ることなしに、出版することができない。

また、翻訳物以外の二次的著作物は、著作権者の許諾を得ることなしに、作成することができない。

以上

## 目次

はじめに.....	8
一、官僚との対話.....	9
二、医者との対話.....	26
三、労働者との対話.....	41
四、ニートとの対話.....	51
五、自殺願望者との対話.....	72
六、仁侠人との対話.....	91
七、未婚女性との対話.....	106
八、老婆との対話.....	121

九、経営者との対話.....	131
十、二元論者との対話.....	151
付録一、余事象法について.....	171
付録二、天使通信について.....	194
付録三、加重評価表について.....	197
付録四、自己レベル・チェックシートについて.....	203
付録五、人間の構造について.....	210
おわりに.....	212

尊念和尚問答記



## はじめに

ある地方の山寺に一風変わった和尚がいた。彼の名は、尊念。 齡（よわい）七十六になるが、眼光するどく、檀家（だんか）を捕まえては説法を飛ばす、地元の名物和尚である。

彼は毎朝三時に起きては足芯呼吸を行い、それから本堂の掃除と御祈祷、更には庭掃除と座禅をしてからあさげを作る。何かから何まで一人で寺を切り盛りしているので、てんやわんやの忙しさではあるが、人のためとあらばどこでもおもむき説教をする。そんな彼を敬遠する者もいるが、わざわざ遠くから彼を頼って訪れる者もいる。

これは、そんな彼の問答を集めた問答集である。彼の言葉がきつとあなたに力を与えてくれると信じて筆を執った。さあ、どんな問答なのか？とくと御覧あれ！



一、官僚との対話

ある夏の昼下がりに、尊念がいつものように山門で掃除をしていると、背広を手にした中年の男が石段を登ってくるのが見えた。やや小太りのその男性は、息を切らして汗だくになりながら山門にたどり着き、そして、尊念を見かけると、

「やゝ、和尚さん。この階段は、いつ登ってもきついですな。」

と、汗をぬぐいながら尊念に話しかけた。

すると尊念は、

「百八段あるからの。四苦八苦するのも無理もない話じゃ。」

と、軽くあしらえながら笑った。

「ところで、今日は、何用で来られたのかのつ？」そう尊念が尋(たず)ねると、

男は、

「もうすぐお盆なので、御先祖の供養に來させてもらいました。」と答えた。

「それは何よりなことじゃ。仏さんもさぞ喜ばれておることじゃろう。どうじゃな、帰りにでも庫裡(くり)に寄っていかれよ。粗茶を用意するでな。」そう尊念が応えると、「ありがたいことです。是非そうさせて頂きます。」と、男は言い、一礼をしてその場を去った。

それから二十分ぐらゐると、その男は、寺の裏庭にやってきた。尊念は手招きをして男を奥の間に迎え入れた。

「どうじゃな、墓参りは？」そう尊念がたずねると、

「やゝ、日差しがきつくって焼けるようでした。でも、たまに來てこつして手を合わせてみると、心が洗われるようで清々しい気持ちがあります。」と、男は答えた。それに対して、尊念は、

「そうじゃろう。そうじゃろう。」と深くうなずきながら応えた。

「ところで最近はどうじゃな？だいぶ風当たりが厳しいようじゃが？」

そう尊念がたずねると、男は、

「そうでございます。最近では談合やら天下りやらで、やたら世間の風当たりが、厳しさを増しております。もつとも、我々の方にも、落ち度があるのですから、仕方ない話ではありますが・・・。」と、応えた。

そして、更に続けて、

「それに、自分で言うのもなんですが、最近ではモチベーションというか、やる気のない者がめつぼう増えて、我々の間柄でも覇気のある者はほんの一握りで、ほとんどが事なかれ主義になっております。てまえみそではありますが、私が若いころにはもつと活気がありましたのに・・・。」と、男はため息ながら応えた。

「では、何で最近では、活気がなくなってしまったのかのう。」

尊念が、そうたずねると、男は、

「平和な日々があまりにも永く続いたからではないでしょうか？人間、なまぬるい環境に長く漬かっていると、なまくらなになってしまいますからな。」と応えた。

それに対して尊念は、

「では、なぜ、そちは、やる気があるのかのう？」と、たずねると、

男は、

「そりゃ、私が入った頃は、まだ日本も高度成長期の真っ只中で、世の中もどんどん変わっていったし、なによりも『私がやらなければ！』と言つゝ気概が役人にもありました。今でも、その気持ちには変わりはありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そうじゃろう。そうじゃろう。」と、深くうなずいていたが、しかし、次のように言つた。

「わしは、役人の役目とは、『未来を創造すること』だと思つてゐる。もちろん、この国を直接導くのは、選挙で選ばれた議員であり首相ではあるが、じゃが、きめ細かく国民をサポートしていくためには議員さん達だけでは不可能なのじゃ。また、専門知識を持つてこれらの議員さん達をサポートしていくのも、役人の仕事でもあると思つてゐる。その本分と目標を忘れてゐるからモチベーションが下がるのじゃ。役人たるもの、その職責を理解し、職務にプライドを持つことが、何よりも大事なことなのじ

や。わしは、少なくとも、そう思つておる。」と。

尊念が、そう答えると、男は、

「もつともな話です。」と、頷(うなず)きながら応えた。

「それにしても、役人には、反省すべき点が、まだまだあるのう。例えば、天下りじやが、官製談合をしなければ民間に就職できないというのならば、これは役人の能力不足を露呈(ろてい)しておる。いつでも民間企業に引き抜かれる程に技能を身につけておれば、わざわざ不正な発注をせずとも、自ずとスカウトの声がかかることじやろう。役人といえども、いつでも民間でやっていけるだけの能力を、つねひごろより自己研鑽(けんさん)しておかねばならんのじや。また、甘い誘いに乗らないように、日ごろより金銭管理はしておかねばならん。特に支出を管理し、借金をしないことが大事じや。役人たるもの支出を伴う衝動買い等は特に慎むべきじや。常に家計を健全に保つことは、役人の本分なのじや。」

このように尊念が言つと、男は、

「耳の痛い話です。」と、うつむきながら応えた。

そして、尊念は、次のように続けた。

「じゃが、わしが思うに、談合とは、決して悪いものではないぞ。」と。

尊念が、そう言うのと、男は、

「それは、なぜでしょうか？」と質問した。

それに対して尊念は、

「公共事業を行なうのに民間企業が協力することは、決して悪いことではない。たしかに、民間企業が結託(けつたく)して入札の落札価格を高値に吊り上げる事は悪であるように思われる。じゃが、そのような場合は、単に落札しなければ良いだけのことじゃ。要は、役人が適正な落札価格を分かっていることが問題なのじゃ。例えば、公費を節約するために入札に競争原理を導入せよと主張する者がある。じゃが、極端に落札価格が低ければどうするのじゃ？『今回は大幅に経費削減できました。』と、もろ手を挙げて喜ぶのじゃろうか？そうではないじゃろう。落札価格が原価を割っては、企業はやっていけないのじゃ。この場合は、必ずと言ってよいほど品質に問題が生じるであろう。じゃから、入札価格には、最低価格というものがあるのじゃ。これを下

回る落札価格は認めるべきではない。一方、入札価格には最高価格というものもあるのじゃ。これをいくらにするかは政策によって決めるべきことじゃ。最高価格を最低価格寄りにすれば、経費削減につながり、最高価格を最低価格から離せば、落札企業は利益を得て民間の活力増進につながるのじゃ。じゃから、役人たるもの、最低価格と最高価格を見極める能力が必要なのじゃ。」と答えた。

このように尊念が言つと、男は続けて次のように質問をした。

「では、最高価格びつたりに談合した場合はどうするのですか？」と。

これに対して尊念は、

「そのときは、落札させてあげれば良からう。財政支出を抑えたければ最高価格を下げて、産業を振興させたければ最高価格を上げれば良いだけのことじゃ。どうしても競争原理を持ち込みたいのならば、最高価格を最低価格まで下げていけばよからう。

そうすれば、体力の無い企業は談合についていくことはないじゃろう。また、最高価格と最低価格は事前に公表しておいた方が良いのう。談合して最高価格を狙うもよし、競争して最低価格になるのもよしという訳じゃ。」と答えた。

これに対して男は、次のように質問した。

「では、入札者が全員最高価格以上の場合はどうするのですか？」と。

これに対して尊念は、

「その場合は、不成立とすればよからう。そして、次回からは、入札の範囲を広げるのじゃ。例えば、最初は市内の範囲で入札を行い、それで不成立ならば今度は県内の範囲で入札を行い、それでも不成立ならば全国の範囲で入札を行なえば良からう。仕事を市外の者にとられまいと、市内の業者も必死になって入札を行なうであらう。」と答えた。

「では、落札候補の業者が複数いる場合はどうなるのでしょうか？」

「その男がたずねると、尊念は、

「その場合は、役人の判断でどちらかに決めれば良からう。」と答えた。

これに対して男は、

「それでは、また不正が生じるのではないのでしょうか？」と質問した。

それに対し尊念は、



「それは、そちらしからぬ答えじゃのう。役人たるもの、常に職務にプライドを持って臨まねばならないのじゃ。どうしても自信がなければ、くじ引きで決めれば良からう。」と答えた。

そう尊念が答えると、男は首をうなだれて縮こまってしまった。それを見ていた尊念は、

「自信を持たれよ！未来のために努力なされよ！」と、強い口調で言った。

そして、しばらくの間、男は沈黙していたが、おもむろに

「和尚さん。正直言つて私は迷っています。この先どうやっていけば良いのかと。」と言った。

これに対し尊念は、しばらく目をつむっていたが、おもむろに

「わしが思うに、これからは、《善意》中心の世の中になるぞ。」と答えた。

尊念がそう言い終わると、男は、尊念を仰ぎ見て、

「善意が中心の世の中と申しますと？」と言った。

それに対して尊念は、

「我々は、今まで永い間、営利主義を続けてきた。じゃが、それも限界にきておる。我々はもう変換点に来ておるのじゃ。このまま営利主義を続けておれば、我々は住む場所を失ってしまうことじゃろう。限られた資源の中で人類が永續するためには、何よりも人類が善良であることが必要なのじゃ。それは、企業とて同じことじゃ。じゃから、これからは、企業も善良でなければ生き残れないのじゃ。」と答えた。

すると男は、  
「では、善意中心の世の中になると、世の中全体はどう変わるのでしょうか？」と、  
たずねた。

それに対して尊念は、

「まず、人々は、世の中全体を見て、そして、そこから、今、何を成すべきかという立場で行動することじゃろう。そして、私利私欲を自制し、自然と共に行動するようになることじゃろう。人工物よりも、多くを自然物に求めるようになることじゃろう。そして、私生活は、質素なものになり、経済活動は、今よりも穏やかなものになることじゃろう。」と答えた。

それに対して男は、

「では、経済は、今よりも落ち込んだものになるのでしょうか？」と質問をした。

それに対し尊念は、

「経済は、落ち込むことはなからう。穏やかではあるが、確実に発展していくじやろう。じゃが、今は、全く別の社会にはなることじやろう。」と答えた。

「しかし、そのような社会に、そう簡単になるとは思えませんか？」と男が訊くと、尊念は、

「確かに、そうなるには、時間がかかるじやろう。」と答えた。

そして、尊念は、

「じゃが、それは、確実に進展することじやろう。」と答えた。

それに対して男が、

「私には、そのような事は信じられません。」と言つと、

尊念は、

「信じようが信じまいが、そうなることは確実なのじゃ。じゃから、そちたち役人は、

そうした世の中の変化の芽を、確実に育ててゆかねばならないのじゃ。具体的には、その様な企業に対して、資金と技術をサポートするのじゃ。そして、立ち上げたばかりの企業に対しては、経営技術の指導を行うのじゃ。そのようにして善意の芽を育てなければ、やがて、新しい世の中が変わっていくことじやろう。」と答えた。

しかし、それでも男は、まだ首をかしげ続けていた。それを見ていた尊念は、

「そちたち役人は、未来の社会を創るのが役目であろう。何が大切なのか？今後何が求められるのか？今一度よく考えてみなされ！」と応えた。

それに対して男は、しばらく考え込んでいたが、

「和尚さんの言うことは、一理あるかもしれませんが、しかし、今日は、まだ納得することができません。」と言った。

それに対して尊念は、「やむなし」と思い、軽くうなずき返した。

そして、しばらくの沈黙が続いた後、尊念は、別の話しを切り出した。

「話しは変わるが、そちは、確か道路関係の仕事をしておったのう？」

そう尊念がたずねると、男は、

「はい、そうです。」と答えた。

それに対して尊念は、

「話は変わるが、交通事故は、なんで無くなるのかのう？そちはどう思っているのかのう？」と、たずねた。

それに対して男は、

「私が思うに、車がある限りは、交通事故はゼロになることはないと思います。これは文明の宿命でしょうな。」と答えた。

それに対して尊念は、

「では、小学生は、なぜ新幹線に轢(ひ)かれないのかのう？」と、たずねた。

それに対して男は、

「そりゃ和尚さん。新幹線は車と違って、走っている場所が違いますからな。高架の上を小学生が、歩くことはありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。わしが言いたいのはそのなのじゃ。」と応えた。  
それに対して、

「そこと申しますと？」と、男がたずねると、

尊念は、

「わしが言いたいののは、人と車が道路を共有するから交通事故が起きるのじゃということなのじゃ。人と車が別の道を通れば、人は、交通事故に遭うことはないはずじゃ。」と答えた。

それに対して男が、

「別の道と申しますと？」と、たずねると、

尊念は、

「地下じゃよ。」と答えた。

それに対して男が、

「地下と申しますと？」と、たずねると、

尊念は、

「地下道のことじゃよ。ほれ最近では、リニアモーターカーなるものがあるであろう。あれを地下に走らせて、荷物を運ばせるようにするのじゃ。そうすれば、少なくとも宅配便のトラックに子供がひかれることはなくなるであろう。それに環境にも良さそうだな。どうじゃ、名案であろう。」と答えた。

それに対して男は、

「しかし、それには膨大な予算が掛かりますな。今の時点では、夢の話でしょう。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かにそうじゃろう。じゃが、かつての役人は、全国の津々浦々まで水道網を引いたではないか？そちも、やろうと思えばできるのではないのかのう？予算が無ければ、民間の力を借りてみてはどうじゃ。」と言った。

それに対して男は、

「しかし、それにしても、厳しいものがありますな。日本全国に地下道を引くとすると四百兆円以上のお金が掛かりますな。」と応えた。

それに対して尊念は、

「何事もできないと思っている間は、できないものじゃ。じゃから、まず『できない』と思わないところから始めることが大切じゃ。試しに丸の内あたりでやってみてはどうじゃ？小規模の実験ならば、さほど予算も掛からんじゃろっ？それで調子が良ければ順次拡大していけば良いだけのことじゃ。」と言った。

それに対して男はしばらく黙っていたが、

「そうですね。今度、政府の審議会がありますので、そういう意見もあつたということは言っておきましょう。」と言った。

尊念は、笑みを浮かべて、

「そうか、言ってくれるか。わしのわがままですっかり長引かせてしまって悪かったのう。」と言った。

それに対して男は、

「いえいえ、まだ余裕がありますから大丈夫です。でも、そろそろおいとまさせていただきます。今日もいろいろ話を聞かせて頂きありがとうございます。」と言つと、



席を立つた。それから、尊念は、男を山門まで見送り、ていねいにおじぎをして男と別れた。階段を下る男のうしろ姿を見ながら尊念は、「しっかりなされよ。これからが大事なのじゃ。」と、心の中で励ました。

いつしか日も傾き、裏山ではヒグラシが鳴き始めていた。尊念は、彼の後姿が見えなくなるまで彼の姿を見送っていた。

## 二、医者との対話

夏が過ぎ、朝の空気がしつとりと肌に感じられるようになった頃、尊念がいつものように、お墓で掃除をしていると、遠くで誰かが墓参りをしているのが見えた。そこで、そろそろと近づいてみると、年のころでは三十代前半のメガネを掛けた若い紳士が熱心にお墓に向かつて手を合せていた。青年は、尊念に気が付くと立ち上がり、尊念に向かつて一礼をした。尊念も、これに応えて合掌した。それから、青年は、再びお墓に向き直ると、お墓に向かつて手を合わせた。

尊念は、青年のかたわらまで来ると、こう問いかけた。

「朝早くから、信心深いことです。失礼ながら、お身内の方ですか？」と。

尊念が、そうたずねると、青年は、

「いいえ、違います。」と答えた。

「では、お知り合いの方ですか？」と、尊念がたずねると、青年は、

「まあ、そのようなものです。」と答えた。

よく見ると青年は背も高く、見るからに立派であつたが、その横顔にはどことなく陰鬱(いんうつ)な様子が感じられた。尊念はあまり深入りするのは失礼に当たると思ひ、その場を立ち去るうとしたが、

その時、青年は、

「和尚さんは、毎朝こちらの掃除しておられるのですか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。わしは、毎日ここを掃除してある。」と答えた。

これを聞いた青年は、

「それを聞いて安心しました。この人は、実は、私の患者だった人です。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「そちは、お医者さんであつたか？ 仏さんなら、わしも存じておる。」と応えた。しかし、青年の表情は、相変わらず陰鬱なままであつた。

それを見ていた尊念は、

「仏さんは、わしが一生涯面倒をみるでな。そちは、安心なされよ。」と応えた。

しかし、それでも青年が浮かない表情をしていたため、尊念は、

「何か、悩み事でもおありですか？」と訊(き)いてみた。

これに対して青年は、

「いいえ、特に悩み事はありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「悩むことは良いことじゃ。大いに悩みなされ！」と応えた。

これを聞くと青年は、急に顔を赤らめ、

「悩むことの一体どこが良いことなのですか？ いくら悩んだところで人の命は救えない。」と激しく応えた。

これに対して尊念は、いつもの癖(くせ)がでてしまったのう、と後悔しながらも、

「確かに、悩むだけでは人の命は救えない。じゃが、人は悩むことによって成長するものじゃ。成長すれば、それだけ多くの命を救うことができるじゃろう。」と答えた。

これに対して青年は、

「確かにそうかもしれませんが。しかし、今、私に必要なのは人を救う技術なのです。私は、毎日多くの人の死を目にしています。救えた命もあれば、どうすることもできない命もあります。私は、彼らの命を救いたいです。」と答えた。

それに対して尊念は、

「気持ちわかるが、物事は一朝一夕に、成るものではない。焦ってはいけない。今まで通り、努力をなされよ。コツコツとした日々の努力の先に、成果は実るものじゃ。」と答えた。

それに対して青年は、

「では、和尚さん。絶対助からない命に対して、あなたは、私にどのように向き合えば良いとおっしゃるのでしょうか？どのように技術が進歩しても、人は、永遠に

生きられるものではありません。それでも私は日々治療に向き合っているのです。私とて、本当は、全ての患者を救いたいのです。」と、吐くように言った。

それに対して尊念は、

「確かに全ての人間を救うことは難しい。じゃが、治る可能性が1%でもあるものならば、人はそれに向かって努力すべきじゃ。また直る可能性が全く無い場合でも、延命の努力はすべきなのじゃ。なぜならば、ほんの数日の延命であっても、人の魂が救済される場合があるのじゃ。多くの者は、この世に目的なく生まれ、仕方なく死を迎えるものと信じておる。じゃが、このような考えでは、人は決して救われないのじゃ。まず、最初に自覚しなければならぬことは、人生とは、試練の場であり、この試練の場において、人は忍耐と努力により、魂を磨くことができるということじゃ。そして、病気もその手段の内の一つじゃ。苦痛の中でこそ、人は心を磨かれ、より高いレベルに進歩していける。これこそ、人生の目的であり目標なのじゃ。じゃから、ほんの数日であったとしても、患者に己を省みる時間を与えてやりなされ。そうすることが、患者への、最期の奉仕となるのじゃから。」と答えた。

これを聞いて青年は、驚いた。今までそんなふうには人の最後を考えたことはなかったからである。しかし、あまりにも多くの患者が、絶望の中で死んでゆくのを見てきたので、病気によって心が磨かれるという尊念の言葉は、とても信じていることができなかった。そこで次のような質問を試してみた。

「私は、多くの患者が絶望しながら死んでいくのを見てきました。それでも和尚さんは、病気によって患者の心は磨かれるとおっしゃるのでしょうか？」と、それに対して尊念は、

「確かに多くの者は、絶望の中で死んでゆく。じゃが、その事は、彼らが人生とは何かを知らないから起きるのじゃ。多くの者は、人生とは所有し楽しむものだと思つておる。じゃが、それは勘違いなのじゃ。人生とは、《修行》そのものであり、じやから当然苦しいのじゃ。じゃが、その苦しみこそが、魂を磨くのみ。例えば、苦痛の中にあつても、『ああ、私の魂は、苦痛によって磨かれてゆく！』と思つことができるのなら、苦しみの中にあつて、怒ることは決まらぬのじゃ。そして、仮に、死が近づいたとしても、『ああ、私は、最後の最後まで魂を磨きながら死んで

ゆくのだ!』と思う者は、安らぎを得ながら死んで逝(ゆ)くことができるじゃろつ。そして、このような者は、決して絶望をしたりはせぬのじゃ。じゃから、お医者さんは、末期の患者にさととしてやるのが大切なのじゃ。『最後まで諦めてはいけない自分のすべきことをなされよ。』と。」と答えた。

それに対して青年は、半信半疑に思いながらも、尊念の言葉には一理あると感じていた。しかし、仮に病気が魂を磨くとしても、なぜ死に至らしめるのか?までは、理解できなかった。

そこで、次のように質問を試してみた。

「和尚さん。病気が魂を磨く手段だとしても、なぜ、病気は人を死に至らしめるのでしょうか?」と。

これに対して尊念は、

「世の中の全ての現象は、自業自得によつて生じるものなのじゃ。何人も、これから逃れることは出来ない。これは生きる上でのルールなのじゃ。このルールを冒す者、例えば、自分を大切にしない者や貪る者、無知な者は、病気になる。そして、



時には死に至るのじゃ。これは、ルールであり、どうすることも出来ない。じゃが、このルールが、人生において人の魂を磨いておるのじゃ。死というハンデを背負ってこそ、人は真剣になるのじゃ。じゃから、極端にルールを冒す者は、その代償として、死は、避けられぬのじゃ。じゃが、そのことに、失望することはない。たとえ、人がいかなる悪事を行ったとしても、常に、その時点で取り得る《最善の道》というものが用意されておるのじゃ。その事に気付けば、人はいつでも回復をすることが出来る。そして、仮に死が避けられぬとしても、人は、少なくとも魂を磨くことができるのじゃ。」と答えた。

これを聞いて青年は、少し気分が晴れたような気がした。今まで患者を救えないのは、自分のせいであると信じてきたが、それが、必ずしも自分のせいではないと言われて、気分が楽になった。また、どんな困難な状況においても、最善の道があるという尊念の言葉にも励まされた。

だが、それでも、全てが自業自得であるという尊念の言葉には、まだ腑(ふ)に落ちない点があった。

そこで、青年は次のような質問をしてみた。

「では、生まれながらにして病気である人はどうなのでしょう？彼らもまた自業自得であるとおっしゃるのでしょうか？」と。

これに対して尊念は、

「自業自得には、低いレベルと高いレベルの二種類あるのじゃ。まず、レベルの低い自業自得とは、先のように自分の悪行の成果として病気を得るような場合じゃ。

そして、レベルの高い自業自得とは、自分にさしては非はないが、世のため人のために得る自業自得のことじゃ。これは、魂をより磨くために、自分に高い目標を課した場合に現れる。身障者となる者も、同様なのじゃ。」と答えた。

しかし、青年は、それでも、死んでしまつては元も子もないのではないかと考えた。

そこで、次のような質問をした。

「若くして亡くなつてしまう場合は、どうなのでしょう？」と。

それに対して尊念は、

「仏教には、輪廻転生という教えがある。人は、この世での経験を踏み台に、来世

で再び生を受けるといふ教えじゃ。この世を基準に考えるのであれば、若くして死ぬことは短い生涯でしかない。じゃが、あの世を基準にして考えるのであれば、若くして死ぬことは、ほんの一瞬この世にお邪魔しただけのことなのじゃ。野球で言えば、ワンポイント・ピッチャーのようなものじゃ。じゃが、たとえ、短い一生であつたとしても、それを悔いてはいけない。彼または彼女は、両親に多大な影響を与え、ひいては社会全体に影響を与えるからじゃ。それこそ、彼または彼女の大きな功績なのじゃ。もし、そちが、輪廻転生を認めないとしても、彼らの功績は認めることじゃろつ。」と答えた。

青年は、輪廻転生など信じなかつたが、幼い命が、たびたび社会に変革をもたらすことを知っていた。しかし、そのことは、青年の心を、ますます当惑させた。自分にはひたすら命を救うことが第一だと考えてきたが、尊念の教えは、《死》もまた大事であると言っているように聞こえたからである。

そこで次のような質問を試してみた。

「では、私は、幼い命や難病に苦しむ人を、むしろ救わない方が良いのでしょうか？」

と。

それに対して尊念は、

「そちは、医者じゃろう。医者なら、いつでも全力で患者を救うものじゃ。」と言った。

それに対して青年は、

「それでは、和尚さんの言う患者の功績が、なくなってしまうのではないのでしょうか?」と言り返した。

それに対して尊念は、

「そのような功績は、元来必要ないのじゃ。人の心や社会が、そもそもそのようなものを起こさせるようになっていいるからこそ、そのような功績が必要となるのじゃ。

その様な経験がなくても、人は、元来立派に成長していけるものなのじゃ。」と答えた。

それを聞いて青年は、また一つ気分が晴れたような気がした。そして、また、少しだけ医者としての自信を取り戻したような気がした。そこで、ついでに、もう一つ

の悩みについても質問してみたいと思った。

「では、和尚さん。どうすれば医療事故は、防げるでしょうか？」と。

これに対し尊念は、

「医療事故は、完全に無くすることはできない。なぜならば、人間はミスをすることによって進歩するからなのじゃ。じゃが、そのような理由で、罪も無い患者が、日々亡くなるわけにはいかん。やはり、できることは、やらねばならぬであらう。」と答えた。

そして、更に続けて尊念は、次のように言った。

「まず最初に、そちが取り組むことは、医療事故を《起こせない》ようにすることじゃ。例えば、医療器具ならば、その差込口の形状を目的別に異なる形にすることで、誤った接続ができないようにすることじゃ。点滴などでは、患者さんが誤って外さないように、強固なカバーで患部を覆い、更に鍵がかけられるようにすることじゃ。更に、コンピュータを活用することも肝腎じゃろう。そちらは、既に、コンピュータを導入していることじゃろうが、単なるデータ管理だけでは不十分じゃ。

例えば、タグで薬剤の種類と量を検証したり、内視鏡の画像に色を付けて、見やすくすることは可能なはずじゃ。これらを活用すれば、医療事故は低減することじゃろう。更に、重要なことは、医療の《基準と手順》を明確にして、それらを共有することじゃ。最近ではどの病院もネットワークでつながってあることじゃろうから、それらを、誰でも参照できるようにしておくことは、大事なことじゃ。じゃが、たとえ、これだけの努力をしたとしても、医療事故をゼロにすることはできないじゃろう。人間が関わる以上は、医療事故はゼロにはできないのじゃ。我々ができることは、これらを使って限りなく、医療事故をゼロに近づけることだけなのじゃ。」と。

尊念がそのように言うとき青年は、すっかり仰天してしまった。尊念が博学である上に、尊念の言っていることが、日々の業務に忙殺されている自分には、とてもできそうにないと思えたからである。

すっかり青ざめてしまった青年の顔を見て尊念は、

「たしかに、わしの言うておることは、現状では難しいことじゃろう。じゃが、出

来ないと思ってる間は、何事も出来ないものじゃ。じゃから、まず、出来ないと思わないことが大切なのじゃ。そして、今一つコツを言えば、まず小さい事から始めることじゃ。医療機器の改善にせよ、コンピュータにせよ、そち一人でなんとかするのは確かに無理じゃ。じゃが、ちよつとした時間を作つて、工夫をすることは可能なはずじゃ。そして、少しずつできる事を拵げていくのじゃ。そうすれば、やがては、本当にできるようになることじゃろう。」と答えた。

これに対して青年は、しばらく黙っていたが、おもむろに、

「分りました。和尚さん。できることは、やってみましょう。」と応えた。

これを聞いて尊念は、安堵(あんど)した。

気がつけば、朝日は随分高く昇り、青年のほほに差し込んでいた。青年は、長々と話し込んだことを詫(わ)びて、一礼をすると、その場を去つていった。

それから青年にお目にかかることはなかったが、尊念は、日々厳しい医療現場で生と死に向き合う彼の姿を、時々心に思い浮べた。そして、日々修行にいそしむ自分の姿と重ね合わせた。

そして、思い出したかのように、

「人生とは、つくづくもって修行なり。」と呟(つぶや)いた。

そう言って尊念が目をやると、辺りには、遅咲きの彼岸花が咲き乱れていた。



三、労働者との対話

秋空の良く晴れ上がった日に、一人の男が寺の境内(けいだい)に来ていた。年のころでは、四十歳なかば。中肉中背ではあつたが、顔色も冴えず、なにやら疲れきつた様子でベンチに座っていた。彼を見かけるようになったのはここ半月ばかりのことである。今日のようによく晴れた日には、本堂脇の大きなイチョウの木の木陰で、何をするでもなく小一時間ほどボーとしながら時を過ごしていた。尊念は、前から彼のことを気にかかつてはいたが、今日は意を決して、彼に声をかけてみることにした。

「いい天気ですな。今日はお休みですか？」

そう尊念が、たずねると、男は、

「ええ。まあ。そうです。」と応えた。

しかし、その声には張りがなかったので、尊念はいつもの癖(くせ)でこうたずねた。

「何か悩み事ですか？」と。

これに対して男は、

「ええ。まあ。そんなところです。でも、こうしていると、ほんとに楽になります。」

と応えた。

これに対して尊念は、

「そうじゃな。人間にとって自然が一番じゃ。」と応えた。

男は、しばらくボクとしていたが、思い出したように、次のように尊念に質問をした。

「ところで和尚さん。仕事というものは、どうしたらうまくいくものなのでしょう  
か？私は二十年もサラリーマンをしていますがいまだにうまくいったことがあり  
ません。いつも苦勞の連続ですよ！」と、つぶやいた。

それを聞いた尊念は、

「人はそれぞれの立場で苦勞をするが、それは、皆、修行なのじゃよ。そして、どんな苦勞にも価値というものがあるのじゃ。」と答えた。

これを聞いて男は、尊念のほうに向き直り、

「修行ですか？でも、こんなに苦勞をする修行なら、止めてしまいたいものですね！」と応えた。

これを聞いた尊念は、少し間をおき、

「ところで、そちは、人生の目的というものを知っておるのかのう？」と訊いた。

これに対して男は、すぐさま、

「人生に、目的なんかあるわけないじゃないですか！」と応えた。

これに対して尊念は、

「人には、人生の目的というものが、ちゃんとあるのじゃ。全てはいつも、その目的に沿って最善最適に進んでおるのじゃ。」と答えた。

これに対して男は、声を荒げて、こう言った。

「そんなはずはない。もしそうならば、私がこんな苦勞をするはずはない。」と、それに対して尊念は、

「よいか。人生の目的とは、《自分の心を高める》ことなのじゃ。そちは苦勞しておると言っておるが、苦勞はそち自身を高めておるのじゃ。」と言った。

それに対して男は、

「確かに、苦勞することによって、自分自身が高められたこともあります。だからといって、それが人生の目的にかなっているとは思えません。」と応えた。

これに対して尊念は、

「人生の目的とは、自分の心を高めることなのじゃ。じゃから、苦勞をした分、人は人生の目標に向かったことになるのじゃよ。」と答えた。

しかし、それでも男は、

「それでも、私は、今より楽になりたいのです。なにも毎日暇して生きたいとは思ってはいません。せめて、もう少し効率的に、仕事ができないものかと考えているだけなのです。」と応えた。

これに対して尊念は、

「そちは効率的と言つが、どういふことが効率的じゃと思つておるのかのう？」と、たずねた。

これに対して男は、

「仕事が計画的に進み、上司とも部下とも、コミュニケーションがスムーズにでき、毎日残業しないで帰宅できることです。」と答えた。

これに対して尊念は、

「仕事を行う上で最も大事なことは、仕事の《基準と手順》を定めることじゃ。次に大事なことは、仕事の結果を《評価》し、それを基に、基準と手順を見直すことじゃ。この二つが揃(そろ)つてこそ《改善の輪》は、回り始めるのじゃ。」と言った。

これに対して男は、

「でもなぜ、改善するためには、この二つが揃(そろ)っていないなければならないのでしょうか？」と質問した。

これに対して尊念は、

「人間というものは誰でも、自分のことはよく分かっておるようで、その実、意外と自分のことは分かってはいないものじゃ。じゃから、自分自身を分かるためには、まず何がしかの基準が必要になるのじゃよ。そして、その基準と自分自身の現状とを比較することによって、人は、初めて、自分自身を知ることができるようになるのじゃ。自分を知ることができれば、それを基(もと)に改善していくこともできるのじゃ。じゃから、基準と手順を定めることは大事なのじゃ。そして、その通りに行い、その結果を評価することで、仕事の基準と手順の質が進歩し、やがては仕事そのものが、改善していくのじゃよ。」と答えた。

これに対して男は、

「なるほど確かに、仕事の基準と手順を定めることは重要かもしれませんが、私の会社でも、基準書、手順書なるものはあります。ですが、だからといって、仕事が楽になっているとは思えません。」と言った。

これに対して尊念は、

「では、そちの会社は、仕事が一段落するたびに、仕事の問題点を整理して、元に

なった基準書と手順書の見直しを行ってあるのかのう？」と質問した。

これに対して男は、

「いいえ、行つてはおりません。」と答えた。

これに対し尊念は、

「何事も、評価することは、大事なことじゃ。『評価することは、創造することである。』とニーチェも言っておろう。まず、過去を反省し、それを未来に生かすことで、改善の輪は回り始めるのじゃ。仕事がつましくない原因は、そこにありそうじゃのう。」と答えた。

これに対して男は、しばらく黙っていたが、

「確かに、基準書や手順書を見直すことの重要性は、分かりました。でも、私の毎日が雑然と過ぎてゆくのは、これも基準書や手順書を評価しないことに原因があるのでしょうか？」と質問をした。

これに対して尊念は、

「多くの基準と手順の中で最も重要なものは、『計画の基準と手順』なのじゃ。そち

の会社でも仕事をするときには、計画を立てるじゃろつ。じゃが、基準と手順なくして、立派な計画は立てられないのじゃ。じゃから、まず、計画の基準と手順を定めなされ。そして、それを基に計画を立て、実行し、評価をするのじゃ。こうすることで、仕事全体の調整が付き、日々の茶飯事には流されないようになることじゃろつ。」と答えた。

男は、尊念の言葉に耳を傾けた。言われてみれば、自分の仕事の仕方は、全くなっていないような気がした。そこで男は、もう一つ悩み事も、尊念に質問してみようと考えた。

「では、和尚さん。どのようにすればコミュニケーションはうまくいくのでしょうか?」と。

男が、そう質問をすると、尊念は、

「まず最初にいえることは、コミュニケーションは、《内から外へ》が原則じゃということじゃ。会社であれば、まず最初に部下に相談することじゃ。そして、次に上司に相談することじゃ。そして、最後に依頼元と相談するのじゃ。間違っても、最



初に依頼元に約束などをしてはいけない。その様なことをしては、あいだに立つ者の立つ瀬が無くなるというものじゃ。」と答えた。

それに対して男は、なるほど思いながらも、

「でも、いきなり部下に相談するなんて、面子(めんつ)が悪いですね。」と応えた。それに対して尊念は、

「確かに、いきなり部下に相談することはバツの悪いことかもしれん。じゃが、本気で部下のことを思うのならば、面子や体裁(ていさい)など気にすることはないのじゃ。そして、正直に、真摯(しんし)にコミュニケーションをすれば、言葉だけではなく、誠実さも、きつと部下に伝わることじゃろう。」と答えた。

それを聴いて男は、すくつと立ち上がり、尊念に向かつて、

「そうですよね!きつとそうですよね!。」と言った。

これを聞いて尊念は、

「そうじゃ。そうじゃとも。じゃが、正直であるためには、忍耐と勇気が必要じゃぞ!くれぐれも、つまらぬプライドに、こだわるではない。」と言った。

それでも、男は、すっかり明くなり、

「今日は、良い話を聞かせてもらいました。また、遊びに來たいと思います。」と言った。

それに対して尊念は、

「いつでも來られよ。今度は、もう少し、ゆっくりと話を聞くでな。」と応えた。

そして男は、大きく深呼吸をすると、尊念に一礼をしてその場を去っていった。帰る男の足取りは、心持ち軽くなったようにも思えた。

そして、天を仰げば、秋空はどこまでも高く、その中を、赤とんぼの群れが、気持ちよさそうに飛んでいるのが見えた。

## 四、二一トとの対話

木枯らしが吹き、木々が葉を落とし始めたころ、尊念は、ある檀家の依頼で、とあるお宅を訪ねていた。というのも、こちらのお宅のご子息が、もう三年以上も学校にも行かず働きもせずで、困り果てた両親が、尊念の噂(うわさ)を聞き、親類のつてをつたつて、尊念に息子の指導をお願いしてきたからである。

尊念は、玄関で丁重に母親に挨拶(あいさつ)をし、そして、応接間で母親より今までの詳しい経緯を伺(うかが)った。青年は、食事やトイレ、お風呂以外は、ほとんど自分の部屋の中に籠(こ)もったきりで、今回も同席はしていなかった。そこで尊念は、母親の案内のもと、青年の部屋を訪ねることにした。

二階の奥にある青年の部屋は、曇りガラスのドアとなっていたが、昼間でも内側は

暗く、カーテンが閉まっている様子であった。

母親が、

「透(とおる)さん！お客さんですよ。お寺の和尚さんが、お見えです。一度でいいからお話を聞いてほしいと、おっしゃっていますよ。」と言ったが、まったく返事がなかった。

お母親は、立て続けに息子の名前を何度か呼び続けたが、ドアの向こうからはいっこうに返事がなかった。そこで、尊念は、ドアの前でしばらく青年を待つことにした。

それから二時間くらい待った頃、やっと部屋の中から青年が外に出てきた。青年は、ドアの前で座禅を組む尊念を見てギョっとしたが、そのまま黙って一階のトイレに行った。そして青年が部屋に戻って来ると、先ほどの坊さんが部屋の前にはいなかった。もしやと思い、自分の部屋に急いで入ってみると、部屋の真ん中に尊念が座っていた。尊念が青年に非礼を詫びよつとしたその瞬間、

青年は、

「ざけんじゃねーよ。」と言いながら、尊念に飛びかかってきた。

青年は、尊念の胸ぐらをつかむと、そのまま部屋の外へ尊念を放り出そうとしたが、不思議なことに尊念はびくともしなかった。何度やっても、びくとも動かないので、すっかり逆上して、青年は、尊念に殴る蹴るの暴行を加えた。

そして、青年は、

「くそ野郎！くそ坊主！」と何度もわめきながら、尊念を殴りつけたが、それでも尊念はまったく動かなかった。

そんな悶着（もんぢやく）を、二十分以上続けたので、さすがに青年も疲れ果てて、尊念の前にしゃがみ込んでしまった。

尊念は、頭から血を流しながら、

「気は済んだかのう。」と青年に問いかけた。

青年は、相変わらず

「くそ野郎！くそ坊主！」とは言ってはいたが、息も上がり手も腫（は）れ上がって、もう尊念に襲いかかることはなかった。

そこで、尊念は、

「無断でそちの部屋に入って、悪かつたのう。じゃが、よかつたら、わしの話を聞いてもらえぬか？」と青年に問いかけた。

しかし、青年は、息を切らしながら、何も言わなかった。

そこで、尊念は、次のような説法を始めた。

「そちは、人とは、意味もなく生まれ、また意味もなく死ぬ者であろうと思うておることじやろうが、それは大きな過ちじや。人は、誰しも、自分の魂を磨くために生きておるのじや。その道は、坂道と同じじや。じゃから、辛くて当たり前なのじや。そして、辛さこそ、人の心を磨くのじや。」と。

それに対して青年は、

「くそ坊主！出て行け！」と大声でどなった。

それに対して尊念は、

「そちは、わしを『くそ坊主』と思つておるようじやが、それはそちの心が、『くそ坊主』じゃからじやよ！他人は、自分の心の鏡なのじや。」と言った。

これに対して青年は、すっかり逆上し、

「ざけんなよ！くそ坊主！どうして俺が、くそ坊主なんだよ！」と、どなりちらしながら、尊念の胸ぐらをつかんだ。

これに対して尊念は、

「外界とは、自分の心の表れなのじゃ。心の中に醜いものがあれば、外側に醜いものが見え、心の中が澄んでおれば、何事も醜くは見えないものじゃ。」と語った。

これに対して青年は、

「醜いものを、醜い、と言っているんだよ！あんたの言っていることは、全く分んねえな！いいから、さっさと出てゆけよ！」と、尊念の襟を締め上げながら言った。

これに対して尊念は、

「わしは、そうやすやすと、出てゆくわけにはゆかん。そちの母上に頼まれておるでな。」と、冷ややかに言った。

それを聞いた青年は、益々逆上し、尊念を部屋の外に引きずり出そうとしたが、やっぱり尊念は、動かなかつた。そして、しまいに、尊念の前にどっかりと、腰を下ろし、そして、

「勝手にしろ！」と言いながら、尊念に背を向けて、一人、ネット・ゲームをやり始めた。

尊念は、しばらく黙って彼を見ていたが、彼の技があまりにも巧みなので、

「うまいものじゃな。」と、思わずつぶやいた。

青年は、なお、黙々とゲームを続けたが、やはり尊念のことが気になった。あまりにも、尊念が静かにしているので、後ろを振り向くと、尊念は座禅をしていた。

青年は、ムツとして、

「お坊さん。坐禅だったら外（ほか）でやってくれよ！」と言った。

尊念は、おもむろに目を開けると、

「そうじゃな。わしの勤めは、説教じゃったな。」と言った。

それに対して青年は、

「説教も、他でやってくれよ！」と言った。

それに対して尊念は、

「そうはゆかんのじゃ。そちの母親に頼まれておるからのう。」と言った。



それに対して青年は、

「何度も何度も、母親つて言うな！」と言った。

これに対して尊念は、

「母親とは、偉大なる存在じゃ。母親とは、正に、生命の母体なのじゃ。その母親なくして、何者も、この世に生を受ける事は、できないのじゃ。」と応えた。

それに対して青年は、

「母親なんか、そんなたいそうなもんじゃないよ。どうせH好きで、おやじとHしたから俺が生まれただけのことなのさ！」と言った。

これに対して尊念は、

「そちは、生命を軽視しておるが、生命とは、偉大なる存在じゃ。生命が、この世に誕生すること自体、偉大なる出来事なのじゃ。」と言った。

それに対して青年は、

「じゃ。何か？俺も偉大なる存在というわけかい？毎日こうしてゴロゴロしているだけで、何もしないこの俺が、いったいどこが偉大だと言っただよ！」と叫んだ。

これに対して尊念は、

「人間とは、だれしも偉大なる存在じゃ。どんなに汚れていようと、それはあくまでも表面上のことじゃ。ちょうど川底に、ダイヤモンドが落ちたようなものじゃ。一見、その輝きを失っているように見えても、その本質は何も変わらないのじゃ。」と言った。

それに対して青年は、

「笑わせてくれるね！お坊さん！俺の心がダイヤモンドと言っのかい？この怠け者で小心者のこの俺が、ダイヤモンドというのかい？」と言った。

それに対して尊念は、

「人間だれでも心の奥底に、決して汚れぬ《不動のプライド》を持っておるのじゃ。その心は、純粹無垢に輝き、決して傷つくことはないのじゃ。そちも心さえ磨けば、すぐさま、光り輝くことじゃろう。」と言った。

それに対して青年は、

「お坊さん。あんた、つくづく変っているね。不動のプライドだって？そんなプライ

ドは感じたことはないね！」と言った。

それに対して尊念は、

「レベルが低い者は、不動のプライドを感じる事はないのじゃ。不動のプライドを感じるためには、心のレベルを上げねばならぬのじゃ。」と言った。

それを聞いた青年は、ムツとしながら、

「じゃ。どうすれば、その心のレベルとやらを、上げることができるんだい？」と問  
い込んだ。

それに対して尊念は、

「己(おのれ)の心のレベルを上げるためには、まず自分自身を愛せねばならぬ。己を愛することは、全ての愛の基本なのじゃ。じゃから、まず、自己を愛しなされ！自己を愛せば、必ず己の心のレベルは上昇するのじゃ。」と答えた。

これに対して青年は、

「自分なんか、愛せる訳が、あるわけないじゃないか？ いったい、どうすれば、自分を愛せると言うのかい？」と、吐くように言った。

これに対して尊念は、

「己を愛することとは、己の身体を愛することなのじゃ。己の身体を愛せば、やがて身体には生気が漲(みなぎ)り、いつしか、自分を愛し、他人を愛することができるようになるのじゃ。」と答えた。

これに対して青年は、

「お坊さんの言っていることは、分からねえな！なんで、自分の身体を愛すると、それが自分や他人への愛に繋(つな)がるわけ？」と訊(き)き返した。

これに対して尊念は、

「そちは気づいておらんじやろうが、そちの身体とは、いつもそちを支えようと、黙々と努力をし続けておるのじゃ。その身体を思いやり、いたわることは、身体に対する慈愛であり、身体は必ずや、そちに応えようとしてくれるのじゃ。そして、その思いは、生命エネルギーとして、そちの身体に溢(あふ)れ出し、やがてそれは、他人に対する愛や善意という形(かたち)となって表れるのじゃ。」と答えた。

それに対して青年は、にがにがしい顔をしながらも、

「じゃ、どうすれば、身体を愛せるわけ？詳しく教えてくれよ！」と言った。  
これに対して尊念は、

「身体を愛するためには、まず、正しい呼吸・正しい食事、それと適度な運動と適切な休憩（休息を取り、常に身体を清潔に保つことが必要じゃ。そして、正しい呼吸とは、喫煙を避け、埃（ほこり）やカビ臭のない場所で、新鮮な空気をゆっくり鼻から吸い込み、鼻または口からゆっくりと息を吐き出すことをいうのじゃ。そして、正しい食事とは、食べる時は十分に咀嚼（そしゃく）し、暴飲暴食を避け、甘い物・アルコール類・肉類を控え、間食をやめることをいうのじゃ。そして、適度な運動とは、激しくもなく、また一日中動かないでもなく、適度に身体を動かすことをいうのじゃ。そして、適切に身体を休ませるとは、長時間、仕事や勉強を続けるのではなく、時間をおいて身体をリラックスさせ、夜は十一時前に寝ることをいうのじゃ。そして、身体を清潔に保つとは、高温・多湿を避け、毎日のように身体を洗浄し、清潔な衣服をまとうことをいうのじゃ。そして何よりも大切なことは、これらの事柄が守られるように、自分自身を律（りっ）し続けることじゃ。つまり、自分の欲望を抑え、身体に対する思い

やりを優先させるのじゃ。そうすることによって、やがて身体はエネルギーに満ち、そちも、自然と、他人に優しくなれるというものじゃ。」と答えた。

それに対して青年は、すっかり、うんざりした顔をしながら、

「そんな、うざいことはできないね！それに、なんで、自分の欲望よりも、体に対する思いやりを優先させるわけ？楽しければいいじゃん。好き勝手に生きて何がわるい？どうせ人間、最後には死んじやうわけだし。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かにそう言う者もある。じゃが、その考えは、間違っておる。我々は、いつも試されておるのじゃ。恵まれた環境で不幸な環境で、どう行動するかを、いつも試されておるのじゃ。確かに、そちの言っていることは、もっともじゃ。じゃが、それで得られるものは、何も無いのじゃ。そのような一生は、空(むな)しい一生なのじゃ。」と答えた。

それに対して青年は、

「じゃ、どういう一生が空しくないといいわけ？」と問いかけた。

それに対して尊念は、

「空しくない一生とは、自分の心のレベルを高める一生のことじゃ。自分の心を高めることなしに、空しさを避けることはできんのじゃ。」と答えた。

それに対して青年は、

「じゃ。どうすれば自分の心のレベルを高められるわけ？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「人の心は、愛し、又は善意を行い、又は努力をし、又は忍耐をすることで高められるのじゃ。何も愛さず・善意を行わず・努力もせず・忍耐もしない者は、決して己の心のレベルを高めることはできないのじゃ。」と答えた。

これを聞いた青年は、ショックを受けた。正に、自分のことを言われているように思えたからである。青年は、しばらく唾然(あぜん)としたが、我に返ると、こう質問をした。

「じゃ和尚さん。俺は、具体的に何から始めれば良いのでしょうか？」と。

これに対して尊念は、

「そうじゃな。まず、そちは、自分を愛することから始めねばならぬのう。」と言った。これに対して青年は、

「自分を愛するということは、さっきのあれですか？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。その通りじゃ。まず、そちは、自分の身体を愛することから始めねばならぬのう。」と言つと、おもむろに立ち上がり、部屋のカーテンと窓を開け放った。すると、部屋いっぱい、日の光が射し込み、それと同時に外の涼しい風が部屋の中に入ってきた。青年は、日に照らされた尊念の顔を見て、ハツとした。そこには、尊念にした今までの惨(むご)たらしい仕打ちの跡が残っていた。尊念は、しばらく黙って立っていたが、おもむろに青年に向かってこう言った。

「どつじゃな。気持ちよかるう。自分を愛することとは、気持ちの良いものなのじゃ。」と。

青年は立ち上がって、窓辺に行くと、久しぶりに自分の部屋の外の風景を見た。もうすっかり秋めいたその庭は、何年かぶりに見る風景のように思えた。そして、その景



色を、思いつきり吸い込むように深呼吸をすると、いままで胸の中に溜まっていたモヤモヤが、一気に出てゆくような気がした。しかし、再び部屋の中に眼をやると、それとは対照的に雑然とした風景が目の中に飛び込んできた。青年は、自分の部屋の醜（みにく）さに、改めて気づき、愕然（がくぜん）とした。

それを見た尊念は、

「どうじゃな。自然とは、美しいものじゃろう。じゃが、そちの部屋も、それに劣らず美しくなるものじゃ。」と言った。

これに対して青年は、

「この部屋が、美しくなるのですか？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「そうじゃとも。どのように汚れていようと、コツコツと続けておれば、最後には綺麗になるものじゃ。」と答えた。そして、目の前の小さなゴミを拾い集めると、ゴミ箱に入れ始めた。青年は、それを、しばらく見ていたが、やがて、青年も手伝い始めた。それから二人は、協力して掃き掃除と雑巾がけを行い、結局、一時間もしないう

ちに、部屋はすっかり綺麗になってしまった。それこそ、何年かぶりに見るきれいな部屋であった。

尊念は、見違えるようになった部屋を前にして、次のように言った。

「どうじゃな。できたであろう。人間は、やればできるものなのじゃ。」と。

それに対して青年は、

「そうですね。確かに、そうですね。」と返事をした。

それに対して尊念は、

「じゃが、これからが大変じゃぞ。人間というものは、いわば欲望の塊じゃ。油断をすると、すぐ身勝手な行動をしてしまう。じゃが、いつも、己の《今の行動》を意識しておれば、欲望は、抑えることが出来るじやろう。」と言った。

これに対して青年は、

「今の行動ですか？」と、不思議そうに応えた。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。今の行動じゃ。人は、普段、《今》というものを意識せずに暮らしてある。

じゃから、知らず知らずのうちに、目先のことにいつい気をとられがちになるものじゃ。じゃから、どんなに感情的になっても、今の自分の行動に目をやっておれば、やすやすとは、感情に流されることはなくなるものじゃ。」と答えた。

青年は、たびたび感情的になつては、多くの人を傷つけたことを思い出し、少し、反省しようと思つた。しかし、次のような質問をした。

「でも、感情的になつて失敗してしまつた場合は、どうすればよいのでしょうか？」と。

それに対して尊念は、

「そのときは、素直に謝(あやま)ることじゃ。勇気を持って謝れば、相手もいつかは許してくれることじゃろう。そして、そうすることで、そちもまた、進歩することができるのじゃ。人間とは、失敗を繰り返し、螺旋(らせん)状に進歩するものじゃからじゃ。」と答えた。

これを聞いて青年は、にわかにもるさを取り戻した。今まで、自分を責め続けてきたが、やっと、それから少し解放されたような気がしたからである。

そして、青年は、次のように質問をした。

「和尚さん。私は、次に何をすればよいのでしょうか?」と。

それに対して尊念は、

「次は、まず、今後の計画を立てることじゃ。そのためには、まず、紙と鉛筆を用意し、そこに理想の自分の姿を書いてみることにじゃ。そして、どのようにすれば、それに近づけるのか?その具体的な手段を書いてみることにじゃ。そうすれば、そのときからそちは、理想に向かって一歩近づいたことになるのじゃ。そして何よりも大事なことは、人生には、世俗的なものを求める水平方向とは別に、精神的な高さを求める垂直方向というものがあることを理解することじゃ。自分の理想を水平方向だけでなく、垂直方向、すなわち愛や善意、それと忍耐や努力を実現する方向にも求めるのじゃ。そうすることによって、そちの人生は、より充実したものになることじゃろう。」と答えた。

それを聞いて青年は、笑(え)みを浮かべた。

それを見て取り尊念は、

「そうと決まれば、善は急げじゃ。さつそく、紙と鉛筆を用意なされよ。」と言った。それを聞いた青年は、さつそく紙と鉛筆を用意し、机に向つて今後の自分について考へ始めた。それを見とどけ、尊念は、ゆつくり彼の部屋を後にした。

尊念が、一階に下りて来てみると、応接間の手前に、お母さんがしゃがみこんでいるのが見えた。二階で大声や大きなもの音がしたものだから、すっかり怖じ気づいて、立てなくなつていたのである。お母さんは、尊念の顔を見ると、大きく泣き崩れ、

「すみません。すみません。」と何度も謝つた。

これに対して尊念は、

「心配なさるな。このようなことは大したことではないのじゃ。」と言つた。

それでも、お母さんは、ただただ謝り続けるだけであつたが、尊念は、お母さんの傍（かたわ）らに立ち、

「わしは、大丈夫じゃ。心配いらん。今日は、このへんで失礼させてもらいますじゃ。」  
と言ひ、袂（たもと）から手ぬぐいを取り出し、頭に巻きつけると、お母さんに、軽く会釈（えしやく）をして、その場を去つていった。

しかし、お母さんは、その後も、しばらくは、泣き続けるのみであった。

それから、二、三日して、尊念がお寺で庭の掃除をしていると、あの青年のご両親が、お布施と菓子折りを持って訪ねて来た。二人は、尊念に丁寧(ていねい)にお礼を言つと、菓子折りとお布施を尊念に手渡した。尊念は、二人を庫裡(くり)に案内し、お茶を出してもてなした。聞けば、その後、青年は、家の手伝いを少しはするようになつたという。

それを聞いた尊念は、

「それは、なによりなことじゃ。」と心えたが、二人に向かつてこう付け加えた。

「よいかな。大事なものは、これからじゃぞ。くれぐれも彼のことを、心配したり憐(あわれ)んだりしてはいかん。心配や憐みとは、人を《低く評価する》ことなのじゃ。そんなことをされては、人は、心を成長させることができないのじゃ。じゃから、決して彼のことを心配したり憐れんだりしてはいかん。彼を高く評価し、信じることこそが、今の彼には必要なのじゃ。」と。

これに対して、二人は、明るくはつきり、

「はい。」と返事をした。

これを聞いて尊念は、

「ウン」とうなずき、二人に向かって笑顔を見せた。

それから、尊念は、ひとときの間、談笑を楽しんだ。それは秋の日の、つかのまの幸せであった。

## 五、自殺願望者との対話

忙しい正月の法要も終わったある雪の降った朝、尊念がいつものように雪掻きに庭に出てみると、真新しい雪の上に一筋の足跡が付いていた。不審に思った尊念が、その足跡をたどって行くと、一本の松の木の枝に、少年がロープを掛けているのが見えた。

それを見て尊念が、

「コラ！」

と大声を出すと、少年は、ビックリしたように尊念の方を振り返り、その拍子に、足もとを滑らせて転倒してしまった。

尊念が、慌ててそこに駆けつけてみると、少年は、後頭部を強打したらしく、雪の



上で大の字になっていた。尊念は、少年の体を抱き起してみたが、少年はもうろつとして全く要領を得なかった。仕方ないので尊念は、法堂（はつとう）まで少年を抱き抱えて行った。

法堂に着くと尊念は、まずストーブに火を入れ、布団（ふとん）を引き、少年の濡れた衣服を脱がして、布団の中に少年を横たえた。少年は、特にケガをした様子もなかったが、転倒のシヨックで、そのままやすやすと眠りこんでしまった。尊念は、少年の所持品を調べてみたが、特に身元が分かるようなものはなかったので、尊念は、少年が目覚めるまでしばらく様子を見ることにした。

それから、小一時間ほど経った頃、少年は、ようやく目を覚ました。少年は、見知らぬ場所で寝ている自分に気がつき、きよとんとしていた。

それを見ていた尊念は、

「どうじゃ。気がついたかな？」と少年に優しく語りかけた。

少年は、最初、うとうとと目を開けていたが、いきなり目の前におやじの顔が現れたので、ハッと驚きガバツと毛布をめくって飛び起きた。そして、全裸の自分に気が付

き、更に驚いた。

それを見ていた尊念は、

「悪いが、そちの服は、そこに干させてもらったぞ。下着まで濡れておったでな。」と言った。

それを聞いた少年は、ようやく正気を取り戻し、

「ここは、どこですか?」と、たずねた。

これに対して尊念は、

「ここは、敬足寺の法堂じゃ。」と答えた。

それを聞いた少年は、事の始終を少しづつ思い出した。確か自分は、死のうと思って、この寺までやって来て、そして、松の木の枝に、ロープを吊(つ)るそうとしていたら、坊主に怒られ、その拍子に転んだ、ということまでは思い出した。

「すると、このおやじが、あの坊主だったかな?」と思った直後、少年は、慌(あわ)てて飛び起き、

「すみませんでした!」と全裸のまま土下座をした。

それを見ていた尊念は、

「なあに、あやまることはない。じゃが、首吊とは関心しないのう。お寺は、死んだ者が行く場所でも、生きている者が逝(ゆ)く場所ではないのじゃ。」と言った。そして、尊念が、少年に甘茶を差し出すと、少年は、それを受け取り、毛布に包(くる)まりながら、それをすすり飲んだ。

それから、尊念は、少年のために、適当な衣服を見つくり、

「わしの、法衣(ほうえ)じゃが、着てみなされ。ないよりは、ましじゃろ。」と言って、少年に法衣を差し出した。少年が、それに袖を通してみると、意外にもサイズはピッタリであった。

少年の血色(けっしょく)が良くなってきたのを見た尊念は、

「じゃが、なんでまた、自殺など図ろうとしたのじゃ。」と質問を試みた。

これに対して少年は、しばらく黙っていたが、おもむろに、

「みんなを、見返してやろうとしたのです。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「見返すとは、どういう意味じゃな？」と質問をしてみた。

それに対して少年は、学校でいじめられていることと、それに、親が真剣に向き合ってくれないことを、ポツリポツリと語り始めた。

尊念は、それを聞きながら、終始、うなずいてはいたが、やがて、

「そちの気持ちは、分かるが、じゃが、事の責任を、他人のせいにははいかんのう。」と言った。

これに対して少年は、

「でもどうすればいいんですか？学校でいじめられると、地獄ですよ。先生も向き合ってくれないし。」と言った。

それに対して尊念は、

「人には、誰にでも主体性というものがあるのじゃ。じゃから、どのような環境であっても、常に人は次の行動を自由に選択することができるのじゃ。それができないと思っておるのは、そちの思い込みにしかすぎないのじゃよ。」と答えた。

これに対して少年は、

「でも僕は、学校じゃ、ズボンを脱がされたり、お金を取られそうになったりするんですよ！それでも自分でなんとかできると、和尚さんは言うのですか？」と言った。これに対して尊念は、

「そちは、先ほど死のうとしたではないか？その気持ちがあれば、何事も成せない事はないはずじゃ。」と答えた。

これに対して少年は、

「でも、ズボン脱がされたら、メチャメチャ恥ずかしいですよ！」と言った。

これに対して尊念は、

「確かに、その通りじゃ。じゃが、死ぬ気になれば、なんでもできるものじゃ。今度は、一度死ぬ気で立ち向かってみてはどうじゃ。」と答えた。

これに対して少年は、

「でも和尚さん、相手は複数ですよ。無茶苦茶強そうなやつもいるし、とても勝ち目なんかありません！」と応えた。

これに対して尊念は、

「確かに、そちには、勝ち目はなかるう。じゃが、そうゆうことに立ち向ってこそ、人生に価値が生まれるのじゃ。」と答えた。

しかし、少年は、尊念の言うことに全く納得していなかった。

それを見ていた尊念は、

「よいかな。《人生とは、自らを創造すること》なのじゃよ。怖がっていても、何も生まれん。立ち向かってこそ、価値が生まれるのじゃ。」と言った。

それに対して少年は、

「でも和尚さん、僕には、そんな勇氣はありません。」と言った。

それに対して尊念は、

「そちは、先ほど死のうとしたではないか。その勇氣さえあれば十分じゃ。」と答えた。

それに対して少年は、

「でも、和尚さん。人間は、死ねば楽になるのでしょうか。僕は、そんな日々より、死ぬほうがましです。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かに、死ねば楽になるように思える。じゃが、その事によって人間は、大事なものを失うのじゃ。」と答えた。

これに対して少年は、

「大事なものは、なんですか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「大事なものとは、《魂を磨く機会》のことじゃ。」と答えた。

それに対して少年は、

「魂を磨く機会ですか？」と驚きながら訊き返した。

それに対して尊念は、

「そうじゃ、魂じゃ。人間とは、肉体と魂からできるといわれておる。そして、

その魂は、肉体的な苦痛によって磨かれるのじゃ。じゃから、死んで肉体を失えば、

魂を磨く機会も失われることになるのじゃ。」と答えた。

それに対して少年は、

「でも、僕は、そこまでして、魂を磨きたいとは思いません。やっぱり、死んだ方が

「楽じゃないでしょうか？」と応えた。

それに対して、尊念は、

「確かに、生きることは、苦痛じゃ。じゃが、生きることには耐え続けておると、だんだん忍耐は平気になってくるものじゃ。そして、真っ直ぐに耐え続けておると、そのうち、はつらつとした気分になさえてくるものじゃ。ちようど、高い山に登ると、さすがにいい気分になるようなものじゃ。」と答えた。

少年は、尊念の話を不思議そうに聞いてはいたが、

「でも、和尚さん。僕は、いじめられても、ちっとも気持ち良くなんかなりません。」と応えた。

それに対して尊念は、

「それは、そちが、苦痛に真っ直ぐに向き合っっておらんからじゃよ。苦痛に、向き合っつて、それを乗り越えてこそ、さすがにいい気持ちになるものじゃ。」と答えた。

それに対して少年は、

「でも、和尚さん。僕には、そんな苦痛に向き合っつ勇氣は、とてありません。」と応



えた。

それに対して尊念は、

「勇気を出すには、まず、『自分を捨てる』ことが大事じゃ。自分を捨てなければ、何事も成すことは出来んじやろう。」と答えた。

それに対して少年は、

「でも、和尚さん。僕には、自分を捨てる勇気はとてありません。」と応えた。

これに対して尊念は、

「まず、自分の中の見栄や利己心を全て捨てるのじゃ。そうすれば、自ずと恐怖は遠（しりぞ）くことじやろう。」と答えた。

これに対して少年は、

「でも、和尚さん。見栄や利己心は、どのようにすれば捨てることができるのでしょうか?」と質問をした。

これに対して尊念は、

「そのためには、まず、自分を愛し、そして、自分を高く評価することじゃ。そうす

れば、自ずと見栄や利己心は、退くことじやろう。」と答えた。

これに対して少年は、

「では、どの様にすれば自分を愛することができるのでしょうか？」と質問をした。

これに対して尊念は、

「そのためには、まず、自分自身を知らねばならぬであろう。」と答えた。

それに対して少年は、

「では、どの様にすれば、自分自身を知ることができるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「そのためには、まず、自分の耳を塞(ふさ)いでみることじや。自分の耳を塞いでみれば、血の流れる音や鼓動、それに自分の息づかいさえ聞こえてくるじやろう。それは、そちが今、生きておる証拠なのじや。そして、それは、そちの細胞の一つひとつが、懸命に生きておる証(あかし)なのじや。そして、そちの生は、まさに、それらによって、支えられておるのじや。けなげに、そちの生を支える、一つひとつの細胞に、

そちは、愛と感謝の気持ちを送らねばならぬ。そのように、そちの生は、そちのみで支えられているわけではないことを、まず、そち自身が、理解する必要があるのじゃ。」と答えた。

これを聞いて少年は、驚いた。今まで、自分の体をどのように考えたことは、一度もなかったからである。そこで、試しに少年は、自分の耳を塞いでみた。確かに、そこは、様々な生命の活動する音に満ちていた。

そして、

「この音は、確かに、生きている証拠なんだな。」と思った。

そして、尊念に対して、次のような質問を試してみた。

「和尚さん。僕は、この先、自信を持って、生きていくことができるのでしょうか？」

それに対して尊念は、

「もちろんそうじゃ。じゃが、そのためには、もう一つ、自分を知らねばならぬであらう。」と答えた。

それを聞いた少年は、

「もう一つの自分とは何ですか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「もう一つの自分とは、そちの特徴に係わることじゃ。そちには、もちろん両親がおるじやろう。そして、その両親にも、また両親がおることじやろう。そのようにして祖先とは、およそ無限のように広がっておるのじゃ。そして、そちは、それら全ての祖先の特徴を継承しておるのじゃ。すなわち、そちとは、全ての祖先の特徴を継承する最高の存在であることを、そち自身、自覚せねばならぬのじゃ。」と答えた。

これに対して少年は、

「でも、僕は、そんなに優れていませんよ。」と応えた。

これに対して尊念は、

「それは、そちが、努力不足じゃからじゃよ。確かに、最初から使える能力は限られておるし、時間も限られておる。じゃから、全てにおいて天才になるわけにはゆかぬが、限られた分野に集中すれば、必ず、優れた能力が現れるはずじゃ。じゃから、自

分の得意分野に集中して、努力なされよ！」と答えた。

これに対して少年は、

「では、自分の得意分野は、どのようにすれば見つかるのでしょうか？」と、たずねた。

これに対して尊念は、

「そちの得意分野の種というものは、そちの好きな分野の中に埋まっておるのじゃ。人間、何かが好きであるということは、その中に、自分の才能の種というものが、眠っておるといふことなのじゃ。じゃから、そちは、自分の好きなことをなされよ。そして、あきらめずに努力をしなされ。そうすれば、やがて必ず芽が出て、成長し、花が咲き、実がなることであろう。」と答えた。

これを聞いた少年は、にわかに喜んだ。自分は、勉強はあまり得意ではないが、絵を描くことだけは、好きだったからである。少年は、すっかり元気を取り戻し、自宅に帰ると言い出した。

それを聞いた尊念は、

「そうじゃ、そちに良いことを教えてやるう。」と言い出した。

そして、すくつと床の上に立ち上がると、

「そちに、呼吸法を教えてやるう。」と言った。

それを聞いた少年は、

「呼吸法ですか？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「左様、呼吸法じゃ。現代人は、皆、呼吸を軽視しておるが、呼吸とは、元来食物同様、生きる上で、重要な要素なのじゃ。」と答えた。

そして、床の上にゆるりと立つと、

「まず、両足を肩幅よりやや狭めに開き、足先を、ほぼ平行にして立つ。次に、足の裏を意識しながら、全身を緩(ゆる)め、足の裏に向かって大きく息を吐き降ろしながら、ゆつくりしゃがんでゆくのじゃ。そして、ここまでが、準備運動じゃ。そして、息を吐き切ったら、両手を下げたまま、足の裏から息を吸い上げるようなつもりでゆつくり立ち上がり、意識を、膝(ひざ) 下腹部、肛門、背中と移してゆく。そして更

に、意識を背骨に沿ってゆっくり上げてゆき、頭のテッペンまで来たら、そこで軽く息を止めるのじゃ。そして、しばらくしたら、意識を身体の前面を通してお腹まで降ろしてゆき、そこではしばらく息を止めた後、足の裏に向かって、柔らかく口から息を吐いてゆくのじゃ。そして、九割方まで、息が無くなったら、ゆっくりと足の裏に向かってしゃがんでゆくのじゃ。これを、数回繰り返し、最後に全身で息を吸い上げ、その後、しゃがまずにゆったりと、全身で息を吐き降ろしてゆくのじゃ。」と言って、見本を示した。

尊念の動作は、とても緩慢(かんまん)で、まるでスローモーションを見ているかのようであった。少年は、尊念の動きの遅さに、しばし、あっけにとられながら、それを見ていた。

動作を終えた尊念は、

「どうじゃな。そちも、やってみんかな？」と少年に言った。

それを聞いた少年は、

「いえ、いえ、和尚さん。僕には、とても、そんなまねはできません。」と言った。

これを聞いた尊念は、

「なにも、最初から長く呼吸をする必要はないのじゃ。呼吸は、五年も続けておれば、自然と長くなるものじゃ。じゃから、最初は、自分のできる範囲で、ゆったりと呼吸をしておれば、十分なのじゃ。」と答えた。

それを聞いて少年は、おもむろに立ち上がると、尊念の真似をして呼吸を始めた。それは、今までに経験したことが無いほど、長くてゆったりとした呼吸であった。そして、それを七回繰り返した後、ゆっくりと息を吸い上げて、そして、ゆったりと吐き降ろしてゆくと、まるで全身のエネルギーが辺(あた)りに放出されるようにさえ感じられた。

呼吸を終えて尊念は、

「どうじゃな。何か感じたかな？」と少年にたずねた。

これに対して少年は、

「なにか、背中とか全身とかが熱くなったような気がします。」と答えた。

それを聞いた尊念は、



「そうじゃろう。呼吸とは、生命エネルギーの源、即ち、気食は同源なのじゃ。これでそちも、自殺など、もう考えることは、ないじゃろう。」と答えた。それに対して少年は、苦笑しながらそれに応えた。

それを見ていた尊念は、

「よいかな。人は、誰しも、人生を自由に選択することができるのじゃ。じゃから、どこまでも自分を愛し、真直ぐに努力をなされよ。そうすれば、きっと、自ずと道は開けるといふものじゃ。」と少年に語った。

それを聞いた少年は、力強く、

「ハイ。」と返事をした。

尊念は、彼の服を手にとると、乾いていることを確認してから、彼に手渡した。少年は、それを受け取ると、さっそく着替え、そして、法衣をたたんで尊念に手渡した。尊念が、それを受取り、土間を渡って扉を開けると、外には、雪が降っていた。

尊念は、少年に傘を手渡し、

「雪が積もっておるからのう、階段を降りる時は、気をつけるのじゃぞ。」と言った。

少年は、傘を手に取り、申し訳なさそうにお辞儀(じぎ)をすると、雪の中を歩いていった。尊念は、少年を見送ると、いつものように寺の勤めをし始めた。

その後も、雪はしんと降り続き、やがて、少年の足跡は、見えなくなっていた。

## 六、仁侠人との対話

バレンタインデーが近づいたある日、尊念が法事の帰りに商店街を歩いていると、道の真ん中に人だかりができていた。なにやら二人の男が言い争っているようで、やたら、やかましい怒鳴り声が聞こえていた。尊念は、何一つ気にすることなく、その脇を通り過ぎようとしたが、急に人垣が割れて、一人の男が尊念の足元に転がり込んできた。尊念が、男が転ってきた先に目をやると、一人の大男が物凄い勢いで尊念の方に突進してくるのが見えた。男は、尊念の足元に転がる男を掴（つか）み起し、「返せねえって、言うのか！コノヤロウ！」と言って、男に向かって拳（こぶし）を構えた。

尊念は、すかさず、

「暴力は、いかんぞ！」と、男を諫(いさ)めたが、

それに対して男は、大声で、

「坊主は、黙っている！」と言った。それでも、尊念は、男の腕を制そうとしたので、それに、すっかり逆上した男は、尊念に掴(つか)みかかり、その拍子にもう一人の男は、地面に尻餅をついた。そして、これ幸いとばかりに、よつんばいになり、一目散に人垣の中に駆け込んでいった。男が、それに気付いて振り向いた時には、時すでに遅く、その男の姿は、もう、ほとんど見えなくなっていた。

男は、

「とんだ邪魔をしてくれたな！坊主！」と言つと、尊念を突き飛ばした。

そして、男は、ものすごい形相(ぎょうそう)で尊念をにらみ続けたが、尊念は、平然と男の瞳を見つめ続けた。そんなならみ合いが、かれこれ一分ほど続いた後、

男は、

「やめじゃ！やめじゃ！坊主、いじめても、しゃくないしな。」と言い出し、くるりと向きを変えると、両手をポケットに入れて、人垣を押しよけるように歩き出した。

ほどなくして、辺(あたり)りは、平静を取り戻し、皆、思い思いの方向に歩き出した。尊念もまた、襟を正すと、また帰路を歩み始めた。

二、三十メートルほど歩きだした時、後ろから尊念を呼び止める大声が聞こえてきた。振り返ると、声の主は、先ほどの大男であった。

男は、

「オイ。待てよ！坊さん！」と言つて尊念を呼び止めて、

そして、

「あんた、悪いが、ちょっと、この先、付き合つてくんねえかな？」と言つた。

尊念が、訳を尋(たず)ねると、男は、

「すっかりしらけちまつたから、ちょっと、飲み直そうと思つてよ。」と答えた。

尊念が、当然のように断ると、男は、

「まあ、まあ、まあ」と言つて、尊念の袂(たもと)を掴(つか)んで、歩き出した。尊念は、袂が裂けてはかなわぬと思い、そこは、そのまま男の後について行つた。

五分ほど歩くと、尊念と男は、とあるビルの十階にある高級クラブの前に辿(たど)

り着いた。

扉を開けると、

「いらっしやいませ。」と艶(つや)っぽい声がして、奥からママさんがすかさず出てきた。

そして男を見るなり、

「あら、マサさん。お久しぶり。」と言って、色っぽく男にからだを寄せてきた。

そして、ママさんは、尊念に気づくと、冷静に、

「あら、珍しい！お連れさん。」と言って、尊念に微笑みかけた。

尊念は、ママさんに軽く会釈をすると、その場を立ち去ろうとしたが、すかさず男は、尊念の袂を持ち、

「まあ、まあ、まあ。」と言いながら、尊念を店の奥のシートに引っ張り込んだ。

そして、男は、シートに座り、すっかりリラックスした様子となった。そして、間もなくボトルが用意され、二人の女性が、尊念と男の両端についた。

男は、女の肩に腕を回し、左手でグラスを持ちながら、

「あんだ、さつきは、いい目をしてたよ。」と言い、グラスに注がれたブランデーを、一気に飲み干した。

尊念は、一切の物に手を付けようとしなかったので、

それを見ていたホステスは、

「あら、お坊様、御飲みにならないのですの？」と、たずねた。

これに対して尊念は、

「わしゃ、結構じゃ！」と軽く応えた。

それを聞いたもう一人の若いホステスは、

「お坊様つて、ストイックなんですな。」と明るく応えた。

二人のホステスは、何とか場を盛り上げようとしたが、尊念は、全くそれに動じなかった。

それを見ていた男は、

「悪いが、席を外してくれねえかな？ちよいと、お坊さんと話がしたいんでね。」と言った。

それを聞いた若いホステスは、

「あゝ、お坊様を独り占めなんてずる〜い。」と言った。

これを聞いて、男の動きが一瞬止まり、それを見ていた、もう一人のホステスは、すかさず若いホステスの手を引いて、そそくさとその場を後にした。

ほどなくして軽躁(けいそう)さが去り、辺りには心地よい音楽が流れ出した。男は、グラスを手に取り、それをゆっくり眺めては、なかなか話を切り出さなかった。

それを見ていた尊念は、

「用がなければ、帰らせてもらうぞ。」と言った。

それを聞いた男は、

「まあ、そう言わずに、ゆっくりしていけよ。」と言って尊念を引き止めた。それでも尊念は、席を立とうとしたので、

男は、

「ちよいと待ちなよ！あんたには、まだ話があるんだよ！」と言って、尊念の袈裟(けさ)を引っ張った。



尊念は、どつしりとシートに座ると、

「ところで、話とは、なんじゃ。」と訊き返した。

それに対して男は、

「さつき、あなたに眼付けられた時、不思議と威圧感を感じたんだが、あれはいったい何なんだい？」と問いたました。

それに対して尊念は、

「それは、そち自身のことじゃよ。世界とは、映し鏡のようなものじゃ。そちは、わしの中にそち自身を見たのじゃよ。」と答えた。

それに対して男は、

「フツ」と鼻で息をしながら、ニヒルに笑い、

「笑わせてくれるね、お坊さん。俺が見たのは、おれ自身だと言っのかい？」と言った。

それに対して尊念は、

「その通りじゃ。そちは、わしの中にそちを見たのじゃ。」と応えた。

それを聞いた男は、高らかに笑い、

「おら、あんたが気に入ったよ。」と言って、またグラスを飲み干した。

そして、

「でもよう。他(ほか)のやつじゃ、そんなものを感じないのは、どついう訳だい？」と訊き返した。

これに対して尊念は、

「それは、その相手が、純真でなかったからじゃよ。およそ人間以外の万物は、純真そのものなのじゃ。じゃから、自分の姿を、そのまま相手の中に見るものなのじゃよ。」と答えた。

これを聞いた男は、膝をたたいて笑い出し、

「おら、あんたが益々気に入ったよ。」と言いながら大笑いをした。

そして

「おら、永いこと、どちらの世界も見てきたが、あんたみたいな人間は、初めてだよ！」と笑いながら言った。

尊念にとつては特におかしな話ではなかったので、尊念は、男が笑い終わるまで黙っていた。

そして、

「訊きたいのは、それだけかな？」と、たずねた。

男は、目に手をやり、

「あゝ、久しぶりに笑つたよ。」と言いなから、

「でも、まだ訊きたいことは、あるんだよ！」と言つて尊念を引き止めた。

そして、

「ところで、あんた、そんなけつたいな説法、どこで身に付けたんだい？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「これは、誰に聞いたわけでもないのじゃ。自然に習得したものなのじゃよ。」と答えた。

それに対して男は、

「じゃ、どうすれば、それは、自然に習得できるんだい？」と、たずねた。これに対して尊念は、

「まず大事なことは、毎日を誠実に生きることじゃ。そして自分と自然を愛することじゃ。そうすれば、自(おの)ずと自然の道理は見えてくるものじゃ。」と答えた。

それを聞いた男は、また鼻で笑いながら、

「誠実ねえ？ 誠実とは、そんなにたいそうなものかねえ。」と応えた。

それに対して尊念は、

「誠実とは、絶対人を裏切らないことなのじゃ。誠実によつて、人は、人(…他人と自分)の心の内に愛を奏(かな)でることができるとのじゃ。」と答えた。

それを聴いて男は、また鼻で笑って、

「あんた、意外とロマンチストだね。だが、あんたの言うことは、ちつとは分かるよ。

こつちの世界も、誠実とは、絶対裏切らないことだからな。」と言つと、またグラスを口にした。

尊念は、男の中に意外な純真さを見ていた。元より《悪とは妄想に過ぎない》と思つ

ていたので、両極端は必ず似ているはずじゃと、確信をしていた。

それで、

「そちは、そちの人生をどのように見ておるのかのう？」と訊いてみた。

それに対して男は、

「そうか！人生と来たか！人生？人生？ん、俺の人生とは、まあ、ちっぽけなものだな。」と応えた。

それに対して尊念は、

「そちは、人生とは、捧げることじゃと、感じておるはずじゃ。何に人生を捧げるかで、人生の価値は決まるのじゃ。そちは、いったい今、何に人生を捧げようとしておるのかのう？」と、たずねた。

それに対して男は、しばらく黙っていたが、グラスを口にすると、

「そうだな。極道そのものかな？」と答えた。

その後、しばらく沈黙が続いたが、尊念は、おもむろに、

「両極端は、似ておるはずじゃ。じゃから、そちも精進を重ねれば、自(おの)ずと道

は開けることじゃろつ。」と応えた。

これに対して男は、

「じゃ、どのように精進すれば、道が開けるんだい？」と尊念に質問をした。

これに対して尊念は、

「まず自分を愛することじゃ。そして、ひたすら人に尽くすことじゃ。」と答えた。

これに対して男は、また鼻で笑って、

「そりゃ無理だね！和尚さん。俺は、到底自分を愛せない。」と言った。

これに対して尊念は、

「自分とは、記憶しているところの者なのじゃ。じゃから、過去の自分は忘れて、こ

れからの自分を愛しなされ！」と言った。

これに対して男は、

「俺は、到底過去の自分を忘れることはできない。忘れる訳にはいかないんだ。」と言

った。

それに対して尊念は、

「自分を許すのじゃ。自分を許せば、過去の縛りから解放されることじゃろう。」と言った。

これに対して男は、

「俺は、自分を絶対許す訳にはいかねんだ！」と怒鳴りながら両手で激しくテーブルを叩いた。

これに対して、周りの客は、一斉にこちらを振り返り、その後、一瞬の静寂が漂った。

尊念は、しばらく黙っていたが、男が落ち着くのを見とどけると、おもむろに、

「全てを捨てなされ！全てを捨てて最高の善意を実践なされよ！それが、およそ人の為しうる最高のヨーガ（心の道）なのじゃ。」と応えた。

それに対して男は、荒い息を抑えると、

「あんた、いいことを言うね。所詮、極道とは、罪滅ぼしなのかもしれねえな！」と言った。

しかし、男は、

「だが、和尚さん。俺は、この世界にしか生きてはいけねえ。」と答えた。

それに対して尊念は、

「人がどのように生きるかは、その人の判断に委ねられておるのじゃ。じゃから、そちは、そちの信じる道を歩まれよ。」と答えた。

それに対して男は、

「ああ、そうさせてもらうぜ。」と言つと、気を取り直して、またグラスを口にした。そして後ろを振り向き指を鳴らすと、すぐさま二人のホステスが駆け寄つて来た。男は、女を両脇に抱え、終始ご満悦であつたが、酔いが回つたのかそのうち寝入ってしまった。尊念は、男が寝入るのを見届けると静かに席を立ち、料金を払つて店を後にした。そして、寺に着いた時には十二時を回つていた。

翌朝、尊念は、いつもの通りに寺の勤めを行った。夜明け前、尊念は、凍える手で庭掃除をしながら昨日の出来事を振り返つていた。確かに、過去の業(ごころ)を解消するには、《愛》以外には、最高の善意の実践しかなさそうである。しかし、極道の世界でそれを行えば、命と引き替えになるかもしれない。尊念は、退路の無い人生を歩む男の姿に胸を痛めた。見上げれば、いつしか東の空は白み始め、境内(けいだい)には、



梅の花が咲いているのが見えた。

## 七、未婚女性との対話

ひな祭りが過ぎたある日、尊念は、とあるホテルのラウンジに来ていた。と言つのも、ある檀家の御婦人に、彼女の娘さんと会うように頼まれたからである。

待ち合わせ時間を過ぎること三十分、ようやく、一人の娘さんがラウンジに現れた。年のころでは三十過ぎで、すらつとした美形のお嬢さんであった。娘さんは、尊念に一礼をすると尊念の向いの席に座った。尊念は、娘さんに何か注文するように促し、それに対して、娘さんはレモンティを頼んだ。

程なくして注文の品が届くと、尊念は、

「今日は、せっかくの休日に来てもらうて申し訳ない。そちも聞いておろうが、そち

の母上からそちの身の上相談に乗って欲しいということじゃったので、こうして、こ足勞願ったわけじゃ。」と言った。

しかし、娘さんは、特に話す事は何も無いといわんばかりに、うつむくだけであった。

そこで、尊念は、

「何か、悩み事でも、お在りですか？」と訊(き)いてみた。

しかし、娘さんは、相変わらず、うつむくばかりで返事をしなかった。

仕方がないので尊念は、

「会社はどうじゃな。」と訊いてみたが、

娘さんは、

「ええ、まあ。」と言つものの、それ以上話は進まなかつた。

娘さんの母親からは、娘が、お見合いを断つてばかりいるので、何とかして欲しいとの依頼であつたが、尊念にとつても若い女性を相手にするのは苦手であつた。

そこで、尊念は、ある男性の話をしてみた。

「昔、わしの古い友人に純粹な奴があつてな、その男が、ある日、とある所の娘さん

に恋をしたそうじゃ。最初は、片思いであつたが、そのうち両思いとなり、じゃが、何年経つても通り一辺倒の挨拶以上には、関係が進まなかつたそうじゃ。じゃが、男は、それでも彼女を一生愛する決意をしたそうじゃ。そちは、そのような男性をどのように思うのかのう？」と、娘さんに訊いてみた。

それに対して娘さんは、少し考えた後、

「その人は、バカだと思えます。世の中に、女性は、沢山(たくさん)いるのに、一生を棒に振るなんて、その人は、きっと、バカだと思えます。」と言つた。

それに対して尊念は、

「では、相手の女性については、どう思うのかのう？」と訊いてみた。

それに対して娘さんは、

「その人も、バカだと思えます。」と答えた。

それに対して尊念が、

「それは、なぜかな？」と訊いてみると、

娘さんは、

「両思いなのに、そのままにいるなんて、二人とも、バカだと思えます。どんな事情があるかは知りませんが、思い切って相手の胸に飛び込んで行った方が良いと思います。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「もし、そちが、その男の恋人であつたならば、そちは、勇気を持ってその男の胸に飛び込んでいけるのかのう?」と訊いてみた。

それに対して娘さんは、

「たぶん、私は、できないと思います。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そちは、なぜ、それが、できんのかのう?」と訊いてみた。

それに対して娘さんは、

「私には、自信がありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「それは、いったい、何に対する自信なのじゃ?」と訊いてみた。

それに対して娘さんは、かなりバツを悪そうにしながら、顔を赤らめ、

「それは、SEXに対する自信です。」と答えた。

尊念は、これ以上聞いては女性に失礼かと思ったが、ここは心を鬼にして更に質問をした。

「それは、どのような点で自信がないのかのう？」と。

それに対して娘さんは、しばらく黙った後、

「その、男の方に身体を見られるのは、恥ずかしいことです。それに、SEXの時に、気に入ってもらえるかどうか分からないし、それに・・・。」と言ったところで口を閉ざした。

それに対して尊念は、

「それに、なんじゃな？」と、たずねてみた。

それに対して娘さんは、

「それに、良い子が生まれるかどうか分からないし、自分が、良い母親になられるかどうか分かりません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そちは、愛について、少し、誤解をしておるようじゃ。愛とは、永遠・無限なるものなのじゃ。じゃから、そちの思つておるようなことは、心配するに当たらないのじゃ。」と答えた。

それに対して娘さんは、尊念の答えに戸惑いながらも、疑念の思いで、

「無限の愛など、本当に、あるのでしょうか？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「確かに、人は、出会いと別れを繰り返す。じゃが、本当の愛は、永遠・無限のものなのじゃ。じゃから、本当に愛する想いを持つ者の想いは、決して消えることはないものじゃ。」と答えた。

それに対して、娘さんは、

「愛する想いも、死んでしまつては終わりではないのでしょうか？」と訊き返した。

これに対して尊念は、

「確かに、そのようにも思える。じゃが、永遠に思つ心は、決して消えたりはせぬも

のじゃ。少なくとも、そちの心からは、消えたりはせぬことじゃろう。」と答えた。それに対して娘さんは、

「でも、和尚さん。そのように思う方は、稀(まれ)にしかいないのではないのでしょうか？私は、そのような男性に、お目にかかったことはありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「確かに、そのような男性は、稀じゃ。じゃが、男性というものは、本来誰しもその胸に、黄金のハートを宿しておるのじゃ。じゃが、たいがいの男性は、世間の欲情に流され、それに気づいておらんのだ。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「では、男性が、自分のハートに気が付くためには、何が必要なのでしょうか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「それには、禁欲が必要じゃろう。禁欲によって男性は、己の中の本当の愛に気付き始めることじゃろう。」と答えた。



それに対して娘さんは、

「では、どのようにすれば、そのような男性と巡り会うことができるのでしょうか？」と、たずねた。

これに対して尊念は、

「そのためには、まず、自分を磨くことじゃ。そして、自己のレベルを高めていくのじゃ。高い山に登れば見通しが良くなるように、そうすれば、そちもまた、理想の男性を見渡せることじゃろう。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「では、どのようにすれば、自分を磨くことができるのでしょうか？」と質問をした。それに対して尊念は、

「その為には、まず、自分を愛することじゃ。自分を愛すれば、自分は必ず輝き始める。そして、ひたすら、人のために尽くすのじゃ。そうすることで、人は、自分の心のレベルを、上げていくことができるのじゃ。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「でも、私は、自分をそれほど愛することはできないと思います。それに、私は、そんなに美人じゃないし・・・。」と応えた。

それに対して尊念は、

「美人とは、作られるものじゃ。人は、美人と思うことで、美人となり、美人と思わないことで、美人でなくなるのじゃ。じゃから、まず自分が美人でないと《思わないこと》が肝腎なのじゃ。」と答えた。

それを聞いて娘さんに、少し笑顔が戻ってきた。

それを見ていた尊念は、

「とにかく、自分を愛しなされ。自分を愛することこそが、全ての愛の基礎なのじゃ。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「母性愛についてもそうですか？」と質問を試みた。

それに対して尊念は、

「左様、母性愛についてもそうです。自分を愛さない者は、他人も愛さないものじゃ。」

じゃから、母性愛を發揮するためには、まず、自分を愛することが必要なのじゃ。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「でも、どのようになれば自分を愛することができるのでしょうか？」と質問をした。それに対して尊念は、

「まず、自分の身体を、十分いたわることじゃ。そして、正しい食生活や運動をすることじゃ。そうすることによって身体は、美しく輝き出すことじゃろう。」と答えた。それを聞いた娘さんは、少し納得した様子ではあったが、

それでも娘さんは、

「でも、和尚さん。私は、まだ結婚する自信が持てません。」と応えた。

それに対して尊念は、

「人生の目的は、内なる愛を発現することとも言われておる。じゃから、臆することなく、どこまでも、自分の愛を拡げていきなされ。そして、愛に生きてこそ、女性は幸福なのじゃ。」と答えた。

これを聞いて娘さんは、嬉しくなった。

しかし、すぐに冷静さを取り戻し、

「でも、私は、障害のある赤ちゃんが生まれては困ります。」と応えた。

それに対して尊念は、

「障害とは、魂を磨く上での、単なる制約にしか過ぎないのじゃ。じゃから、そのことに気が付けば、障害を持った子供であるうとも、自らの人生を悔(く)いたりさせぬことじゃろう。」と答えた。

それでも、娘さんは、納得しきれず、次のように質問をした。

「でも、もしかしたら、子供も授からないかもしれないかもしれません。それでも、私を愛してくれる人は、いるのでしょうか?」と。

これに対して尊念は、

「本当にそちを愛する者は、そちの細胞の一つ一つまでをも、永遠に愛するものじゃ。

じゃから、たとえ、子供を授からなかったとしても、そちを永遠に愛する思いに変わりはしないことじゃろう。」と答えた。

それを聞いて、娘さんの表情は、だいぶ和(なご)んだが、それでも、どこことなく割り切れない思いが影を落としていた。

それを見て取った尊念は、

「そうじゃ、そちに素敵な詩を、プレゼントしよう。これは、太陽と花の美しい会話じゃ。これを聴けば、そちも本当の愛とは何かを、知ることができるじゃろう。」と言って、次のように、詩(うた)を詠(よ)み始めた。

「 太陽は、言った。

『おお、花よ。お前は、なぜそんなに美しい。

可憐(かれん)な花びら、細い茎、生き生きとした葉、深い根。

どれをとっても美しい。』

花は、言った。

『ああ、貴(あなた)とうと(とき)方。私は、貴方に愛され、貴方の愛に満ちています。

私の花びら、私の茎、私の葉、私の根。

私の総てが、貴方の愛に満たされ輝いています。

私の輝きは、貴方の愛の輝きなのです。』

太陽は、言った。

『おお、いとしい花よ。私は、貴方に一層愛を与えよう。』

花は、言った。

『ああ、いとしい方。私は、益々貴方の愛に輝きます。』』と。

これを聞いて娘さんは、笑顔となった。

それを見て取った尊念は、

「どうじゃ。素敵な詩じゃろう。愛とは、このように美しいものなのじゃ。」と応えた。

これに対して娘さんは、

「私。もうすこし、勇気を持って、もうすこし、素直に生きたいと思えます。」と言った。

これを聞いた尊念は、

「そうじゃ。そのとおりじゃ。まこと、女性は素晴らしい。素晴らしい人生、素晴らしい生の可能性は、女性が握っておるのじゃ。無限の愛を発現し、その愛を、彼と共に無限に子孫の中に拡げてゆくのじゃ。そして、それは、過去から未来へと続く人類の無限の生（…無限のチェーン）に対する貢献なのじゃ。」と答えた。

これを聞いた娘さんは、顔を赤らめ、

「ハイ。」と応えた。

そして、時計を見ると、時刻は、午後四時半を回っていた。

尊念は、あまり娘さんを引き止めてはいけないと思い、

「わしの話は、ここまでじゃ。」と言って自分の話を切り上げた。

それに対して娘さんは、

「本日は、有意義なお話を聴かせて頂き、ありがとございました。」とお礼を述べ、

そして、立ち上がると、深々と礼をして、その場を去っていった。尊念は、夕日に美しく映えた娘さんの後姿を見届けながら、ゆっくりとソファに腰を下ろした。そして、窓から入る明るい日射しを見つめながら、しばし、落ち着いた雰囲気を楽しんだ。

それから丁度(ちょうど)一年程経ったある日。お寺に、あの娘さんのお母さんが訪ねて来た。聞けば娘さんの婚礼の日取りが決まったとのことであった。尊念は、この一年間の娘さんの心の成長を想像してみた。そして彼女の幸せを心より祝福した。辺りはまだ寒々とした風景であったが、尊念は、娘さんの晴れ姿を思い、近づく春の訪れを感じていた。



## 八、老婆との対話

桜の便りが聞かれるようになった頃、尊念は、とある病院に来ていた。そこには、旧知の檀家の方が、入院していると聞いたからである。

病室に入ると、見覚えのある老婆が、窓際のベッドに横たわっていた。尊念が、ベッド越しに覗(のぞ)き込んでみると、その老婆は、すっかり寝入っている様子であった。そこで、尊念は、老婆が目覚めるのを、しばらく待つことにした。しかし、老婆は、いつこうに目覚める気配がなかったので、尊念は、簡単な置手紙をしたためて、そつと老婆の枕元に置いた。そして、その場を去ろうとして向きを変えたその直後、肩越しに、

「和尚さんかね？」と尊念を呼ぶ声が聞こえた。

尊念が、振り返ってみると、老婆は、点滴の刺さった手を尊念の方に差し伸ばしていた。

尊念は、すかさず、老婆の手を取り、

「そうじゃ。わしじゃ。久しぶりじゃのう。」と言いながら、老婆に顔を近づけた。

それに対して老婆は、か細い声で、

「和尚さん。わしや、もう、だめじゃ。」と言った。

それに対して尊念は、

「そんなことはない。きつと、良くなる。」と言って、励ました。

それに対して老婆は、

「そんなことはない。和尚さん。自分のことは、よう分かるんじゃ。」と言った。

尊念は、お婆さんの詳しい病状を聞いてはいなかったが、確かにかなり悪そうに見えた。しかし、絶望することは、身体に良くないことだと知っていたので、尊念は、反対のことを言い続けた。

「諦めてはいかん。まだ、これからじゃろう。」と。

しかし、老婆は、

「わしゃ、もう、十分生きた。もう、思い残すことはない。」と言った。

それを聞いた尊念は、

「いや、まだ、やる事はあるはずじゃ。諦めてはいかん。」と言った。

これに対して老婆は、

「わしゃ、もうやることはない。やれる事は、もう、ないんじゃ。」と応えた。

それに対して尊念は、

「その様なことを言うてはいかん。生き切ることこそ、大切なのじゃ。」と答えた。

それに対して老婆は、

「わしゃ、もう、何をやる気力も残つとらん。思い残すことも、何も無いのじゃ。」と言った。

それに対して尊念は、

「今は、身体を治すことが大切なのじゃ。」と応えた。

それに対して老婆は、

「わしの身体が、もう治らんのは、よう判つておる。もう、どうにもならんのだよ。」と言つた。

それに対して尊念は、

「思ひは、いつか、通じるものじゃ。じゃから、治らんと思つてはいかん。」と答えた。

それに対して老婆は、しばらく黙っていたが、そのうち、クルリと尊念に背を向けると、

「和尚さん。悪いが、今日は、もう、帰つてくれんか。」と言つた。

それに対して尊念は、一瞬考えたが、

「そうか、分かつた。それでは、また来るでな。」と言つて、静かに病室を後にした。

それから二週間ほど経つたある日、尊念が、再び病室を訪れてみると、お婆さんの容態は、さらに悪くなつていた。尊念は、ベッドの傍(かたわ)らに腰掛け、お婆さんが気が付くのを待つていた。

それから三十分ほど待つて、お婆さんは、やっと目を開けた。

そして、傍らにいる尊念に気付いて、お婆さんは、

「和尚さん。また、来てくれたのかのう？」と言った。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。」と短く応えた。

それに対して老婆は、

「和尚さん。わしゃ、いよいよ立ち行かなくなってしまうた。わしが、死んだら、和尚さんのお寺に埋めてもらえんかのう。」と言った。

これに対して尊念は、

「何を言う。まだまだじゃろう。」と言った。しかし、あまりにも病状が良くないことは、尊念にも分かっていた。

そして、二人は、しばらく沈黙を続けたが、おもむろにお婆さんは、

「なあ、和尚さん。人は、死んだらどうなるのかのう。わしゃ、仏の世界に行けるのじゃろうか？」と、尊念に問いかけた。

それに対して尊念は、

「そうじゃのう。それは、人、それぞれじゃからのう。」と答えた。

それに対して老婆は、

「わしや、やつぱり、だめかのう。悪いこともたんとやった。やはり地獄に行くしかないかのう。」と言った。

それに対して尊念は、

「そちは、地獄に行くことはないと思うぞ。地獄に行くのは、地獄が好きな奴だけなのじゃ。」と答えた。

それに対して老婆は、

「それじゃ、わしは、仏の世界に行けるのかのう？それとも、神の世界に行くのかのう？」と問いたました。

それに対して尊念は、

「人は、思い描いた世界に行けるものじゃ。仏を思えば、仏の世界に行く。神を思えば、神の世界に行けるのじゃ。」と言った。

それに対して老婆は、

「じゃ、わしは、仏の世界かのう。わしや、観音様の上品なお姿が大好きなのじゃ。」

と応えた。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。愛する思いは、いつか成し遂げられるものじゃ。その様に思つておれば、観音様にもお会いすることができるじゃろう。」と答えた。

それに対して老婆は、

「和尚さん。わしや、その言葉を聞いて安心した。」と言ひ、尊念の片手にそつと手を置いた。

尊念も、お婆さんの手の上にそつと手を重ね、

「そうじゃ。愛する思いは、最後まで持ち続けることが大事なのじゃ。そうすることが、この世に生れた者の、最期の幸せなのじゃ。」と答えた。

それを聞いた老婆は、尊念の手をギョツと握りしめ、

「わしや、最後に和尚さんに会えて、幸せ者じゃ。」と言つて、涙を流した。

尊念もまた涙を流して、しっかりとお婆さんの手を握りしめた。

そして、病室の窓からは、太陽が、ゆっくりと西に沈んでゆくのが見えた。そして、

その赤い光は、最後の最後まで二人の手をそつと照らし続けていた。

それから二週間後、尊念が、再び病室を訪ねた時には、お婆さんの意識は、既になかった。

しかし、尊念は、左手をお婆さんの額の上にかざし、心の中で次のようにつぶやいた。

「お婆さんや、よく聞いておくれ。」

もしかすると、そちには、死というものが近づいておるやもしれん。

じゃが、それを恐れてはいかんのじゃ。できる限り、心を落ち着かせて、

のんびりとした状態に心を保つのじゃ。

じゃが、死は、恐ろしい形相(ぎょうそう)で、そちに迫ってくるやもしれん。

じゃが、それでも、そちは、何も恐れることは無いのじゃ。

その昔、アキレスが亀に追いつけなかったように、

死は、決してそちを追い越すことはできないのじゃ。

じゃから、どうか、心を穏やかにして、これからわしの話すことを、よう聞いて欲

しい。



・  
・  
・

人は、死ぬと様々な世界に生まれ変わるといわれておる。

ある者は、人間となり、ある者は、動物となり、また、ある者は、仏の世界に生まれるという。

じゃが、これらを超えた世界に生まれることが、本当の生の目標であるといわれておる。

そこは、永遠・不変の愛の世界じゃ。

その為には、心の中心に愛を置き、その愛をどこまでも広げていくのじゃ。

そして、『私は、永遠に愛する。』という気持ちを、強く強く持ち続けなされ！

人は、自分にふさわしい世界に生まれる。

永遠に愛する者は、永遠に愛する世界に生まれるのじゃ。

じゃから、永遠に愛する気持ちを、強く持ち続けなされ！

そうすれば、そちは、永遠の愛の世界に、生まれることになることじゃろう。」と。

そして、そのように念じ終わると尊念は、お婆さんの寝顔をそつと見つめた。そして、

軽く礼をすると、静かに病室を後にした。

それから二週間ほど経ったある日、市役所からお婆さんが亡くなった旨の連絡があった。尊念は、斎場(さいじょう)に赴(おもむ)き、遺体と対面すると、棺(ひつぎ)の中のお婆さんに花をたむけた。そして、荼毘(だび)にふしている間も、熱心に祈祷(きとう)を続けた。

それから、遺骨は、遺言により、敬足寺に葬られることになった。尊念は、遺骨を寺に持ち帰ると、お婆さんのために位牌(いはい)を作った。そして四十九日間、熱心に祈祷を続けた。

その後、お婆さんがどのようなかかは、尊念は、知る由(よし)もなかった。それでも、尊念は、お婆さんの幸福を願(ねが)い続けた。

さくらの季節はとうに過ぎ、辺りは新緑のみどりに包まれていた。

## 九、経営者との対話

梅雨も終わろうとしているある日、尊念が、法事の帰りに下町を歩いていると、窓越しに、

「和尚さん！和尚さん！」と、呼びとめる声が聞こえてきた。

尊念がそちらの方を振り向くと、顔なじみの男性が、工場の窓より手招きをしていた。

尊念が、

「いや、社長さん、お久しぶりじゃのう。」と言つと、

その男は、

「和尚さん。この霧雨の中、そんな所を歩いては体に毒じゃ。はよ、こちらへ来て、休まれよ！」と言つた。

見れば、確かに衣は濡れてはいたが、さほどのことでもなかった。尊念は、社長さんのお誘いを断った。

それに対して社長さんは、

「まあ、そう言わずに、寄っていきなされ。それに、相談したいこともありますのじや。」と言った。

人の悩みと聞いては断れないたちであったので、尊念は、少しここに寄っていくことにした。

誘われるままに工場の奥へと歩いて行くと、窓ぎわの一角に小さな事務所があった。

そこに尊念は招かれると、まもなく、暖かい飲み物が用意された。

社長さんは、

「いや、お忙しいところ呼び止めてしまって、すまんかったですな。実は、和尚さんに相談したいというのは、会社のことなんですわ。見たとおり、うちは、ちつぽけな町工場です。もう少し大きくしたいと思っていましたが、なかなかそうもゆかず、今日まで来てしまいました。わしも、いよいよ、よい年になったので、そろそろ引退

することも考えておりますが、しかし、跡継ぎもおらず、かと言って、会社をたたむわけにもゆかず、はなはだ困っておりますのじゃ。なにか和尚さんに良いお知恵がありましたら、賜(たまわ)りたいのですが？」と言った。

それに対して尊念は、

「見たところ、従業員も二、三十人はおるようじゃし、中には良い社員もおるのではないのかのう？」と、たずねてみた。

それに対して社長さんは、

「ここにおける従業員の大半は、わしと同じぐらいの年配で、残りも、新米同様の社員ばかりです。だから、わしの後を継げるような者は、一人もおりません。」と答えた。それに対して尊念は、

「社長さん。人とは、育てていくものじゃぞ。どんなに出来が悪そうに見えても、人は、育つものじゃ。育てもしないうちに、そのように諦(あきら)めてしまつては、いかんのう。」と言った。

それに対して社長さんは、

「でも、和尚さん。経営者になるためには、並の技量では、立ち行かんです。うちの若い衆は、皆、その器ではありません。」と言った。

それに対して尊念は、

「確かに、人には、向き不向きというものはある。じゃが、人には意外な才能というものもあるものじゃ。試しもしないうちに諦めてしまうのは、いかがなものかのう？」と、これに応えた。

それに対して社長さんは、

「ですが、試すといつても、どの様にしたら良いのでしょうか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「まずは、若い衆を五人集めて、これから幹部になるための教育を行う旨を告げるのじゃ。そして、了解を得たら、順次経営のノウハウを伝えつつ、色々な職場を体験させるのじゃ。その結果、ある者は経理向き、ある者は営業向きというように、それぞれの性向が分かってくるじゃろう。そしたら、その中から最終的な後継者を選び出せば良いのじゃ。」と言った。

それに対して社長さんは、

「そうは言っても、うまくいくのでしょうか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「それは、やってみなければ分らぬことじゃ。じゃが、この工場を守りたいのであれば、そうするしかあるまいのう。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「そうですね。確かに、今は、そうするしかなさそうですね。」と応えた。

そして、

「他にも、この工場を良くする妙案がありましたら、教えて頂けないでしょうか？」

と、たずねた。

それに対して尊念は、

「経営において大事なことは、経営の基盤を強化することじゃ。そのためには、まず、借金をせぬことじゃ。借金をすれば、利益が利払いに消えていく。じゃから、苦しくても借金をせんことじゃ。そうすれば、そのうち金まわりは良くなっていくものじゃ。」

と答えた。

それに対して社長さんは、

「和尚さん。それは、無理というものですよ。うちのような零細企業は、借金なしでは、やってはゆけません。それは、あくまでも、夢の話でしょう。」と言った。

それに対して尊念は、

「では、そちは、いつまでも今の状態でよいのかのう。利払いがなければ、そちの会社も、随分楽になるのではないのかのう。」と応えた。

それに対して社長さんは、

「では、和尚さん。どの様にすれば、借金は、せずに済むのでしょうか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「まず、支出を徹底的に抑えることじゃ。そして、工場の《量産性》を高めるのじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、



「量産性と申しますと？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「量産性とは、省力化のことじゃ。今まで二人でやっていたことを一人でやる。その様にすることで、製造コストが下がるのじゃ。そうなれば、利幅が増えて利益も増えるじゃろう。じゃが、それで喜んではいかん。真の経営強化を目指すのであれば、浮いたコスト分で、価格を下げる必要があるじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「しかし、和尚さん。儲かった分、価格を下げては、意味が無いでしょう？」と質問をした。

これに対して尊念は、

「価格を下げれば、市場の占有率（シエア）は、上がるのじゃ。価格が下がっても、利幅が今まで通りなら、出荷が増えて、利益も、増えるはずじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「なるほど、そうですか。ですが、どうやったら量産性は上がるのですかな？」と質

問をした。

それに対して尊念は、

「まずは、やらなくて良い作業を無くすことじゃ。次に、機械が出来る事は、機械に任すことじゃ。そして最後に、人がやらねばならぬ作業であっても、更なる省力化を検討することじゃ。このようにしていけば、順次仕事の量は減ってゆき、量産性は上がっていくはずじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「でも、どのようにすれば、やらなくて良い作業を探せるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「まず、最終製品とは何か？を考えることじゃ。そして、そこに至る最短ルートを書き出して、今の作業と照らし合わせてみることじゃ。そうすれば、やらなくて良い作業は、自ずと分かるはずじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「ですが、量産性を上げては、人余りになりませんか？」と質問をした。これに対して尊念は、

「確かに、量産性を上げれば、人は余るものじゃ。じゃが、その余った人は、新しい事業に割り当ててゆけばよいのじゃ。そうすることで、会社も少しずつ、新陳代謝をしていくのじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、  
「確かにそうですが、新しい事業を切り開くことは、難しいことですねえ。」と応えた。

それに対して尊念は、  
「そこを何とかするのが、そちの役目じゃろう。」と答えた。

それに対して社長さんは、  
「まあ、確かにそうですが、分かりました。他に何か、ご意見はありますか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「そうじゃのう。更に付け加えれば、品質を向上させることも大事じゃのう。そのためには、会社の意義から問い直さねばならんじゃろう。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「会社の意義を問い直すと申しますと？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「会社の意義とは、働く意義を意味しておる。そして、人というものは、仕事に意義を持ってなければ、真に力を発揮できぬものじゃ。確かに、名誉栄達や生活のために働く者もある。じゃが、それでは、真に己の力を発揮することはできないものじゃ。人が真に力を発揮するのは、働く意義が《社会への貢献》と一致するときのみじゃ。じやから、社員の力を発揮させるためには、まず会社の意義を社会への貢献に改めることが必要なのじゃ。そして、その様にすることによって、社員一人一人が、社会の中で、真に力を発揮していくことができるのじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「ですが、会社の意義を変えれば、本当に製品の品質は良くなるものでしょうか？」

と質問をした

それに対して尊念は、

「社会への貢献を目指す者にとって、社会とはいわば家庭と同じようなものじゃ。じやから、その家庭に、粗悪な製品を供給しようと思う者は、おるまい。むしろ、良い製品を、社会に供給しようとするはずじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「確かに、そうですね！で、具体的には、どうすればよいのですかな？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「まずは、会社の経営理念を社会貢献に改めることじゃ。そして、そのことを社員に伝え、自らも、それを日々確実に実践することじゃ。口先だけではなく、厳しい局面でも、自らそのことを実践するのじゃ。そうする事によって、初めて社員は、会社の価値基準が何であるかを知ることができるのじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「なるほど、そうですね。で、他には、何かする事は、ありますか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「更に品質を上げようとするのなら、経営理念に倣(なら)った組織や仕事の仕方の再構築が必要となることじゃろう。そのときには、『トップダウン思考』というものが是非必要になってくるのじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「トップダウン思考と申しますと？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「トップダウン思考とは、上位の目的からそれを実現する下位の手段を順次決めていく思考方法のことじゃ。例えば、その会社の経営理念を『金型生産で社会に貢献する。』としよう。すると、それを実現するためには、金型の品質、価格、納期、環境保全において社会貢献することが必要となってくることじゃろう。そして、次に、例えば、金型の品質で社会に貢献するとは、どのようなことであるかを、考えるのじゃ。」

それが、誤差を千分の一ミリメートル以下にすることだとすれば、次は、どうすれば、それが実現できるかを検討するのじゃ。その様にして、上位から、それを実現する具体的な仕組み（基準と手順）を順次決めていくのじゃ。それが、トップダウン思考というものじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「それは、かなり大変ですな。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かに、大変な作業じゃ。じゃが、そのようにしてこそ、品質や効率を支える最良の組織ができ上がるというものじゃ。」と応えた。

それに加えて、尊念は

「更に付け加えるのであれば、仕事を計画的に行うことが大事じゃ。日々の工程管理や購買管理だけではなく、資金管理や研究開発、それと教育を計画的に行うことじゃ。

また、操業管理だけではなく、仕事の負荷管理と社員の休養管理も行うことじゃ。そうしてこそ、社員は、効率良く仕事ができるというものじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「しかし、そのような管理は、とてもわし一人では、できそうにもありませんなあ。」と応えた。

これに対して尊念は、

「確かに、そち一人でそこまで管理するのは無理じゃろう。じゃが、何事も、成そうと思えば、成せるものじゃ。ここは、面倒くさがらずに、後継者チームを中心に、管理を任せてみてはどうかのう。」と答えた。

それに対して社長さんは、しばらく渋い顔で唸(うな)っていたが、後継者の育成問題もあつたので、

「分かりました。和尚さん。やれるだけのことは、やってみましょう。」と応えた。

それを聞いて、尊念は、喜んだ。

そして、その後、二人は、しばらく、雑談を続けたが、話題は、今後の経済へと移っていった。

そこで、社長さんは、



「和尚さん。これからの世の中は、どのようになつていくのでしょうか?」と質問をしてみた。

それに対して尊念は、

「わしは、この世の中が、今後、《善意主義社会》になるものだと思つてゐる。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「善意主義と申しますと?」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「善意主義とは、人々が善意を基準に行動することじゃ。現在のような営利主義の世の中が、立ち行かなくなつてゐるのは、誰の目にも明らかじゃ。そして、これからは、いかなる組織も営利主義では、生き残れない世の中になることじゃろう。」と答えた。それに対して社長さんは、

「ですが、和尚さん。営利主義の会社は、そう簡単に世の中から消えたりはせんことでしょう。」と応えた。

それに対して尊念は、

「そちは、そう思うておるようじゃが、善意主義の会社は、全ての面で営利主義の会社より優れておるのじゃ。例えば、善意主義の会社は、社会への貢献を目標としておるから、常に、良い製品を世の中に出そうと努力することじゃろう。また、量産性を上げ、常に利益最小を目指しておるから、価格面でも常に業界のトップレベルにあることじゃろう。そして、納期面でも、また、環境面でもそうじゃ。そして、それを実現するために、高い管理能力を備え、無借金経営を目指すことじゃろう。」と答えた。そして更に、

「もし、このように全方向に優れた善意主義の会社が、そちの会社の前に現れたら、はたして、そちの会社は、その会社に太刀打ちしていけるのじゃろうか？」と問いかけた。

それに対して社長さんは、

「そんな会社が現れたのならば、うちの会社なんぞ、ひとたまりもありませんなあ！」と応えた。

それに対して尊念は、

「そうじゃろう。じゃから、今のうちに、そのような会社になっておくことが必要なのじゃ。」と答えた。ここに至って、社長さんは、やっと、尊念が今まで熱心に説明してきた意図を理解した。

しかし、社長さんは、次のように答えた。

「じゃが、和尚さん。うちは、株式会社じゃ。株主のために一定の配当もせにやらんし、利益も上げにやららん。和尚さんの言うような完全な善意の会社になる訳には、まいますまい。」と。

それに対して尊念は、

「では、そちは、株式会社を、やめてしまつてはどうじゃ。自社の株を買い戻せば良いだけのことではないか？」と応えた。

それに対して社長さんは、

「そうはいつても、和尚さん。そんな余裕は、ありません。」と応えた。

それに対して尊念は、

「なにも、今すぐでなくて良いのじゃ。時間をかけて、少しずつ買い戻していけば良いではないか。」と応えた。

それに対して社長さんは、

「そうですね。まずは、業務改善が先決ですな。自社株買いは、後の課題ということにしておきましょう。」と応えた。

それを聞いた尊念は、

「そうじゃ。それで良いのじゃ。」と応えた。

それから、尊念は、次のように言った。

「なあ、社長さん。わたしには、一つ理想があるのじゃ。」と。

それに対して社長さんは、

「和尚さんの理想と申しますと？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「わしの理想は、この世の中に《社会としての組織》が実現されることじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「社会としての組織と申しますと？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「社会としての組織とは、社員を社会の一員のように大切にすることを。ここでは、決して解雇は行わない。どんなに経営が苦しくとも、給料を分け合って生きていく、そんな会社が生まれることが、わしの理想なのじゃ。」と答えた。

それを聞いた社長さんは、胸を打たれた。僧侶の身でありながら、そこまで社会を思いやる、そんな尊念に、改めて胸を打たれた。そして、自分では果たせぬその理想を、自分に託しているのだと思った。

そこで、社長さんは、

「分かりました。和尚さん。わしも、あと何年働けるか、わからんが、和尚さんの理想に少しでも近づけるように、努力を致しましょう。」と応えた。

それを聞いた尊念は、

「そうか、やってくれるか？社長さん。」と言って、社長さんの手を強く握り絞めた。

そして、気が付けば、いつのまにか雨は上がり、雲の合間からは、夏の空が見えていた。

それから数年後、社長さんの会社は、大きくシェア（…市場の占有率）を伸ばし、テレビの取材を受けるまでに成長した。尊念は、その話を聞く度（たび）に嬉しくなった。そして、やがて世界中の企業が、社長さんの会社のように、終生安心して働ける、そんな会社になることを、心より願っていた。

十、二元論者との対話

ある夏の暑い日、一人の青年が敬足寺を訪れた。彼は、大学の理学部の学生であり、以前、尊念の説法を何度か聞き、いくつかの点で疑問を持ち続けてきたという。そこで、今日は、長年の疑問を晴らすべく、敬足寺に乗り込んできたという訳である。

尊念は、彼を本堂に招き、そして、二人は、ご本尊の前で対座した。

開口一番、学生は、

「和尚さん。和尚さんは、世界をどのように捉(とら)えているのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「インドの古い聖典に、万物とは、《神》と《プラクリティ(…幻)》との見せかけの結

合であると記されておる。神とは、プラクリティと《空》以外のすべてであり、プラクリティとは、神と空以外のすべてである。そして、プラクリティは、神の愛に應えて万物を生成する。この様にして、世界は形成され、万物は、流転し続けておるのじや。」と答えた。

その答えに学生は、のっけから仰天したが、気を取り直して、次のように質問をした。

「それでは、和尚さん。物質とは、何でしょうか?」と。

それに対して尊念は、

「物質も、神とプラクリティの見せかけの結合なのじゃ。即ち、物質とは、プラクリティの一部と、神の一部が合体して出来ているものなのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それでは、神は、物質の中で、何をしているのでしょうか?」と質問をした。

それに対して尊念は、

「神は、物質の中で、物質が物質であることを支えておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、



「太陽のような高温の場所でも、神は、物質を支えているとおっしゃるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「その通りじゃ。神の力は、至る所に及んでおるのじゃ。たとえ、太陽であっても、それは同じことじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「太陽は、核融合反応によって、光り輝いているのではないのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「もちろんそうじゃ。神は、太陽の内にあつて、太陽が太陽であることを支えておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、神は、なにゆえに、そのような事をするのでしょうか？」と質問をした。それに対して尊念は、

「神は、万物を愛してある。それ故に、神は、万物を支え続けておるのじゃ。」と答え  
た。

それに対して学生は、少し間を置き、

「それでは、空やプラクリティとは、なんでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「空もプラクリティも、神同様に、始まりもなく終わりもなく存在するものじゃ。そ  
して、プラクリティは、万物の母体であり、空は、いかなる属性も持たないものなの  
じゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、プラクリティは、何ゆえに万物を生むのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「プラクリティは、ただ単に、神の愛に応えているだけなのじゃ。故に、万物は、神  
の性質をよく表わしてある。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、万物のどこが、神の性質を表わしているのでしょうか？」と質問をした。これに対して尊念は、

「鉱物は、神の忍耐と誠実をよく表しておる。そして、生物は、神の多様性と柔軟性、創造性をよく表わしておる。そして人間に至っては、更に知識を理解する力と愛と善意を兼ね備えておる。このように万物は、それぞれが、神の性質をよく表わしておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、  
「生物が、多様性を備えるに至ったのは、単に、厳しい生存競争の結果だったのではないのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、  
「生物は、時間とともに、たまたま高度なものに進化してきたと論じる者がある。じやが、我々は、何億年経つても、地中より新品の自転車が、たまたま現れないことを知っておる。じゃから、自転車よりも遥（はる）かに高度な生物が、たまたま進化するということは決してないのじゃ。それらは全て、プラクリティの意思（…シャクティ）に

よつて進化しておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「すると、人間も、プラクリティの意志によって出現したとおっしゃるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。その通りじゃ。人は、万物の中にあつても、最も神に似ておると言われておる。」と答えた。

それに対して学生は、

「和尚さんの言っていることは、信じられない。失礼ですが、単なる妄想ではないのでしょうか？」と問いかけた。

それに対して尊念は、

「そちら二元論者は、世界とは、物質的なものであり、神など、妄想にしかすぎないと信じておるようじゃが、それは誤りじゃ。神は、こうしている間も、そちの人生を支えておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「信じられない。和尚さんの言うことには、何の証拠もない。」と反論をした。それに対して尊念は、

「では訊くが、野に咲く花は、何ゆえに美しい。我々は、何ゆえに生きておる。そち達、二元論者は、それも皆、たまたまであると論じるのであろう。」と応えた。

それに対して学生は、

「その通りです。和尚さん。我々は、無目的に生まれ、死ねば、《無》になるのみです。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かに、我々は、神の愛に依えて無目的に生まれた。じゃが、この困難な世界に生まれたのは、更に魂を磨くためのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それもプラクリティの意思というやつですか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。その通りじゃ。我々は、魂を磨くことによって、神に至るまで進化することもできるのじゃ。それこそ、この地上に生まれた本当の目標なのじゃ。」と答えた。それに対して学生は、

「魂を磨くのに、何ゆえにこの世界に生まれる必要があるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「そちは、学校の夏休みが、もし、無期限であったとしたら、いつたい、いつ、宿題を終えるのじゃろうか？恐らく、いつまで経つてもやることはないじゃろう。じゃから、宿題をやるためには期限が必要なのじゃ。期限があつてこそ、人は、やる気になるものじゃ。また、資源が限られておれば、人は、様々な局面で、それをなんとか乗り越えようと努力することじゃろう。じゃから、何事も限りあるこの世界とは、魂を進化させる上で、最も都合がよい場所なのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「でも、魂を磨いたところで、死んでしまつては元も子も無いのではないのでしょうか？」

か？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「我々とは、肉体を伴った霊なのじゃ。じゃから、たとえ、肉体が滅びたとしても、魂を失うことは、決して無いのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「和尚さんは、我々が、霊であるとおっしゃるのでしょうか？信じられない。そんな証拠は、どこにあると言うのでしょうか？」と言いつ返した。

それに対して尊念は、

「確かに、霊である自分を捉（とら）えることは難しい。じゃが、我々の本質が霊であることは、幾つかの事実によって知られつつあることなのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それは、科学的に検証可能なことなのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。それらは、科学的に検証可能じゃ。例えば、ある《気》の道場では、肉

体の中に宿る気を、覚醒した状態で体験することができるのじゃ。そして、そのことは、科学的にも検証可能なことなのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それは、だれでも体験できることなのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「それは、誰でも体験することができるものじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それは、僕にでも体験できることなのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「もちろん、そちは、体験することができる。一度、自分の目で確かめてみるのもよ

かるう。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、それは、どのようにすれば体験することができるのでしょうか？」と質問を

した。



これに対して尊念は、

「それは、インターネットで、気と呼吸法について検索してみれば分かることじゃ。

そうすれば、世界中に、様々な体験機会があることを知ることができるじゃろつ。」と答えた。

それに対して学生は、

「分かりました。さつそく調べてみましょう。」と応えた。

しかし、学生は、次のように応えた。

「でも、和尚さん。僕は、未だに、神だのプラクリティだのを信じることはできません。」と。

それに対して尊念は、

「存在しないものを信じたり、存在するものを信じないことは、良くないことじゃ。

じゃから、そうではなく、《考え・感じる》ことが大切なのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、どの様にすれば、神を感じる事ができるのでしょうか？」と質問を

した。

それに対して尊念は、

「じゃが、その前に、そちは、『神とは何か?』を知らねばならんことじゃろつ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それでは、神とは、いかなる者でしょうか?」と質問をした。

それに対して尊念は、

「神とは、無執着、かつ、永遠・無限の愛を有する者なのじゃ。」と答えた。

これに対して学生は、

「では、なぜ、神は、無執着で永遠・無限の愛を有しているといえるのでしょうか?」

と質問をした。

それに対して尊念は、

「もし、神が、無執着でなく、又は、有限な愛を有しておるといのであれば、この世は、もっと恣意(しい)的になっていることじゃろつ。じゃが、現実の世界に、その

ような偏(かたよ)りが無いことが、神が、無執着で永遠・無限の愛の持ち主であることを物語っておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「でも、現に、運の良し悪しや、不平等が起きているではないでしょうか？」と反論した。

それに対して尊念は、

「それは表面上のことじゃ。まず言えることは、どのような状況であろうとも、物理の法則は変わらないということじゃ。そして、この世では、自業自得の法則も、変わらないということじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「でも、現実の世界では、他人を騙(だま)して得をしたり、また逆に、他人に騙(だま)され損をしたりする人がいるではないですか？それでも、神は、永遠・無限の愛の持ち主であるというのでしょうか？」と反論をした。

それに対して尊念は、

「神は、いつも、『人の心の成長』を見ておるのじゃ。他人を騙して得をしたように見えても、魂の成長からすれば、逆に損をしておるのじゃ。また、騙されて苦労したように見えても、実際には、騙された教訓（知識）を得ておるのじゃ。じゃから、心の成長という観点より見れば、人の世においても不平等は、生じておらんのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「でも、和尚さん。何の罪もなく、事故や災害によって死ぬ場合でも、不平等は生じていないとおっしゃるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「その場合でも、自業自得の法則は、破られることはないのじゃ。不慮の事故や災害であつても、本人に何らかの落ち度は、あるものじゃ。本人に落ち度無く、何かを得ることは、決してないものじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それでは、なぜ、神は、人に自業自得の法則を与えているのでしょうか？」と質問

をした。

それに対して尊念は、

「それは、人が、成長するために、神が、与えたものなのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「人の成長と自業自得は、どのような関係にあるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「もし、自業自得の法則が無かったら、人が悪事に流され、その心のレベルを果てしなく下げていったときには、人は、永遠に浮き上がることができぬかもしれぬ。じゃが、自業自得の法則は、常に本人に付いて回り、今の状態が誤りであることを指し続けるのじゃ。そして、本人が、そのことに辟易（へきえき）し、そのことに気づき改心するまで、自業自得は永遠に繰り返されるのじゃ。それは、どのような人も決して見捨てない、神の慈愛を示しておるのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「それでは、和尚さん。人は、成長すると最後に何になるのでしょうか？」と質問を

した。

それに対して尊念は、

「人は、いつの日か、神のように、無執着で、永遠・無限の愛を有する者になること  
じやろう。」と答えた。

それに対して学生は、

「でも、和尚さん。人は、容易に無執着で永遠・無限の愛を獲得することはないでし  
よう。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かに、そつじゃ。じゃが、自己を愛し、そして、日々善意を実践し、その上で、『私  
は、永遠に貴方と一体。』と思うことによつて、人は、最短で、無執着で永遠・無限の  
愛に至ることができるとじやろう。」と答えた。

それに対して学生は、

「『永遠に一体』と思う貴方とは、誰でしょうか?」と質問をした。

それに対して尊念は、

「その対象は、何でも良いのじゃ。じゃが、特に、人は、恋人を対象とすれば、一層強力に、無執着で永遠・無限の愛に至る道を、歩んでいくことじゃろう。」と答えた。それに対して学生は、

「それは、なぜでしょうか？」と質問をした。

これに対して尊念は、

「それは、性の働きによるものじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、性は、どのような働きをするのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「性は、異なるものを結び付ける働きがあるのじゃ。じゃから、性は、精神的にも一体であろうとする者を、強力に結びつける働きがあるのじゃ。」と答えた。

これを聞いた学生は、少し考えた。確かに、性的に結びつく者は、一時的には、愛を感じることもあるだろう。しかし、それでも、それは、無執着なものとはまでは、いえないであろう、と。

そこで次のような質問をしてみた。

「和尚さん、『永遠に一体』と想ったところで、人は、無執着にはならないのではないのでしょうか？」と。

それに対して尊念は、

「『永遠に一体』であろうと思う者は、無執着そのものなのじゃ。なぜならば、相手と一体になることは、自分を捨てることを意味するからじゃ。」と答えた。

それを聞いた学生は、驚いた。人が、そこまで、美しくなりえるものだとは、今まで、考えてもみなかったからである。

そこで、次のような質問をした。

「和尚さん。これから、人類は、どのようになるのでしょうか？」と。

それに対して尊念は、

「人類は、これから益々光り輝くことじゃろう。」と答えた。

これを聞いた学生は、嬉しくなった。暗いニュースの多い昨今で、一条の光明を感じたからである。



そして次のように応えた。

「和尚さん。僕は、和尚さんの話が、ほとんど理解できませんでした。ですが、これからは、もう少し、自分なりに勉強をして、和尚さんの言うことが理解できるようになっていきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。」と。

それに対して尊念は、

「そうか。それは良いことじゃ。寺には、いつでも来られるとよろしい。」と応えた。それを聞くと学生は、立ち上がり、一礼をして、本堂を後にした。

それから一年経ったある日、その学生が、また寺を訪れた。

そして、学生は、

「あれから一年間、自分なりに考えたり、調べてみたりもしましたが、最近になって、やっと、和尚さんの言っていることが、少し分かってきたような気がします。今後も、自分なりに色々やっついていこうと思います。」と言った。

それに対して尊念は、

「そうか、それは良いことじゃ。その様にしていけば、そちも、そのうち、本当の世

界を感じるようになることじゃろう。」と応えた。

そう言つて尊念が天を仰ぐと、林の上には秋空が広がっていた。そして、尊念は、自分も一層精進し、一人でも多くの者が、自分の真の生き方に目覚めてゆけるように、今後、一層努力をしていこうと決意した。そして、そんな二人の横顔を、木漏れ日は、優しく照らし続けていた。

## 付録一、余事象法について

人は悩み苦しむ。皆も、仕事や家庭において、毎日、なにがしかの問題に出会うことじやろう。中には同じことを繰り返して、悩んでおる者もある。そして、問題は、毎日のように訪れ、いつこうに止む気配がない。それは、なぜじやろうか？それは、我々が、本当の原因を知らずに、やるべきことをやつとらんからのじゃ。本当の原因を知り、その本当の対処方法を行なわない限り、同じ問題は、繰り返して起きるのじゃ。

では、どのようにすれば、本当の原因を知り、問題の発生を止めることができるのじやろうか？それに応えてくれるのが、余事象法と呼ばれる思考法なのじゃ。では、余事象法とは何か？まず、その基本の部分から見ていくことにしよう。

多くの者は、「問題 A の原因はどこにあるのか?」と問われても、大抵の場合は、「抽象的過ぎて、答えられない。」「と答えるじゃろう。じゃが、この問いには、答えがあるのじゃ。まず、結論から言つと、この問いの答えは、「問題 A の原因は、問題 A の余事象の、十分条件の余事象の中に存在する。」となるのじゃ。なにやら、お経の様ではあるが、実は、さほど難しいことではない。中学校の数学で、《集合》というものを習つたことじゃろう。四角い枠の中に、丸をいくつも書くやつじゃ。余事象も、十分条件も、そこで教わつたことじゃ。ここで、少しおさらいをしておくと、余事象とは、《そのもの以外》ということであり、十分条件とは、《絶対そうなる条件》のことなのじゃ。どうじゃ、少しは思い出したじゃろうか? それでは、先ほどのことが、なぜ言えるのか、その理由を、図を用いながら説明していこう。

まず、図 1 を、見てほしい。図の右下に、と A が書いてあるじゃろう。これを問題 A と呼ぶことにしよう。すると、全体を表す四角い枠の中で、A 以外の部分(即ち B の部分)が、問題 A の余事象となるのじゃ。そして、B の意味は、「問題 A 以外の状態」即ち「問題 A が起きない状態」を意味するのじゃ。

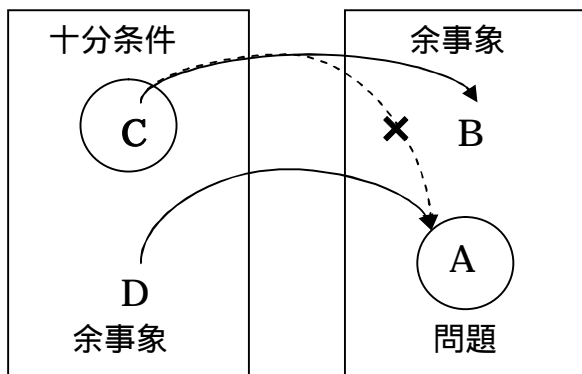


図 1

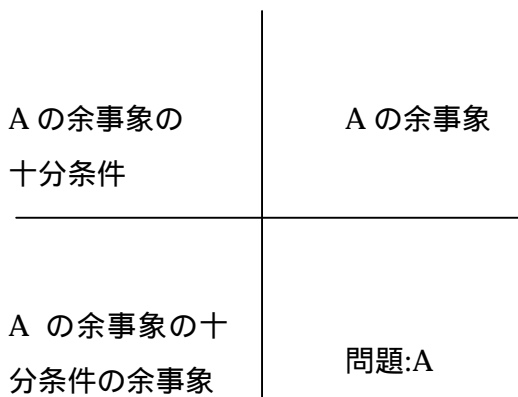


図 2

更に、ここでBの十分条件(C)（：図中の C）を考えてみよう。すると、十分条件(C)の意味は、「問題Aが絶対起きない条件」となる。更に、その四角い枠の中の、C以外の部分（即ちDの部分）が、十分条件(C)の余事象となるのじゃ。

そこで、問題Aの原因というものを考えてみよう。すると、問題Aの原因は、必ず、この余事象(D)の中になければならないことが分かる。なぜならば、仮に、問題Aの原因が、余事象(D)以外のあるところにあるとするのならば、当然、それは、余事象(D)以外の部分、即ち、十分条件(C)の中にあるということになる。じゃが、十分条件(C)は、問題Aが絶対起きない条件であるから、これによって、問題Aが引き起こされることは決してないのじゃ。じゃから、もし、問題Aが生じるとするのならば、その原因は、必ず、十分条件(C)以外の場所、即ち、Cの余事象(D)の中に存在しなければならぬということになるのじゃ。そして、余事象(D)とは、《問題Aの余事象の十分条件の余事象》であるから、これをまとめると、「問題Aの原因は、問題Aの余事象の、十分条件の余事象の中に存在する。」となるのじゃ。分かって頂けたかな？

多くの者は、日々、原因追究に明け暮れておるが、本当の原因は、「問題の、余事象

の、十分条件の余事象の中に存在する「ことを、知っておかねばならないのじゃ。

じゃが、「それが分かったところで、どうやって問題を解決するの?」と言いたいの  
が本音であろう。じゃから、次に、これを用いて、いかにして問題を解決するのかわ  
見てゆくことにしよう。

その為には、まず、紙と鉛筆を用意して下さい。用意が出来たら、紙面の右上に、  
大きめの十字を書いて下さい。そして、次に、十字の右下に、自分の問題の内容を書  
いて下さい。更に、その問題の余事象を、その上(十字の右上)に書いて下さい(図2  
参考)。じゃが、「ここで、「問題の余事象とはどう書くの?」と、また頭をかしげたく  
なることじやろ。思い出して下さい。余事象とは《そのもの以外》のことであつた。  
例えば、そちの問題が、「子供が学校に行かない。」「ことだとしてよう。すると、その余  
事象とは、「子供が学校に行く。」となる。すなわち、余事象とは、その問題の《否定  
形》を書けば良いのじゃ。そして、次に、十字の上段の左と右の中間に、左から右に  
向かう矢印(→)を書いて下さい。そして更に、先に書いた余事象の十分条件を、矢印  
の左側(十字線の左上)に書いて下さい。ここで、十分条件とは、《絶対そつなる条件》

のことであつた。先の例でいえば、子供が絶対に学校に行く条件が、それにあたるのじゃ。子供は何であれば絶対学校に行くのじゃろうか？皆も考えて下され。まず、一と言えることは、「子供は、楽しければ学校に行く。」ということじゃ。学校が楽しければ、学校に行くと言つても、子供は、学校に行きたがるじゃろう。そして、もう一つは、「学校に行くことが、有意義であることを、子供が理解している。」場合じゃ。この場合は、学校がつまらなくとも、子供は、学校に行くはずじゃ。よつて、先の「絶対学校に行く十分条件」とは、「学校が楽しい、または、学校に行くことが有意義であると理解している。」となる。そして、次に、その否定形（余事象）を、その下の欄に書き、最後に、下段の左と右の中間に、左から右に向かう矢印（ $\rightarrow$ ）を書いて下され。ここで、一つ注意して頂きたいのが、「A、または、B」の否定形は、「Aでない、かつ、Bでない」となることじゃ。そして、「A、かつ、B」の否定形は、「Aでない、または、Bでない」となることじゃ。よつて、先の十分条件の否定形とは、「学校が楽しくない、かつ、学校に行くことが有意義であると理解していない。」となる（図3参考）。つまり、子供たちは、学校に行くのが楽しくないし、かつ、学校に行く意義を見



学校が面白い、または学校に行くのが有意義であると理解している。

子供が学校に行く。

学校が面白くない、かつ学校に行くのが有意義であると理解していない。

子供が学校に行かない。

図 3

人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解している。

子供達が学校に行く事が有意義であると理解している。

人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解していない。

子供達が学校に行く事が有意義であると理解していない。

図 4

いだしてないので、学校に行きたがらないのじゃ。そして、子供たちが、学校が面白くない、学校に行く意義を見出せないのは、我々、大人達のせいなのじゃ。我々、大人達が、学校を面白くさせなければならぬし、学校を意義あるものにしてゆかねばならないのじゃ。

では、我々は、更に、原因を掘り下げたい場合は、どのようにすればよいのであるうか？その場合は、それについて、同じ作業を繰り返せばよいのじゃ。例えば、「子供達が学校に行くことが有意義であると理解していない。」と、いうことの原因をもっと知りたいとしよう。その場合は、まず、新たな十字線の右下に、この問題を書くのじゃ。そして、次に、その問題の余事象、つまり、「子供達が学校に行くことが有意義であると理解している。」という言葉を、その上に書くのじゃ。そして、その十分条件を考えて下され。なんであれば、子供達は、学校に行くことが有意義であると、理解できるのであるうか？徹底的に考えて下され。どうじゃろうか？解きましたかな？確かに、これは、難題である。じゃが、わしなら、こう答える。まず、そもそも、なぜ学校に行くのか？それを理解するためには、まず、人生の目的が何であるかを、理解す

る必要があることじゃろう。その上で、人生における学校教育の位置づけと、その効果を理解しておれば、自ずと、学校に行く意義も、分かるというものじゃ。つまり、子供達が学校に行くことが有意義であると理解できるための十分条件とは、「人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解している。」となるのじゃ。そして、これを十字線の左上に書いて下され。そして、ここで注意せねばならないことは、「十分条件を考える際は、考えに枠をはめない。」ということじゃ。とてもできそうにない事や、突飛な考えであっても、それが十分と言えるものであれば、それを取り上げることが大事なのじゃ。そして、最後に、その十分条件の余事象、即ち、「人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解していない。」を、その下に書いて下され。そして、これにより、我々は、子供達が学校に行くことが、有意義であると理解しておらん原因が、彼らが、人生の目的と、学校教育の位置づけと、その効果を理解しておらんところにあったことを、知ることができるのじゃ(図4参考)。

じゃが、「人生の目的とは何か?」、これまた難問の様に思える。じゃが、それは、死の瞬間を考えれば、さしたる問題ではないのじゃ。人は、死の瞬間において、なん

であれば、満足できるのであるか？それが、富や、権力でないことは、明らかである。なぜならば、それらは、この世に残ることもなく、あの世に持っていくことも出来ないものじゃからじゃ。では、何が、この世に残るものであるか？それは、人のために尽した善意や、人を愛した実績なのじゃ。これらは、いつまでも、人々の心に残り、語り継がれることじゃろう。そして、あの世に持って行けるものは、何か？それは、自分の心のレベルの高さなのじゃ。そう、人生の目的とは、「人を愛し、社会に貢献し、己の心のレベルを高めること。」なのじゃ。これこそ、死んでも、この世に残るものであり、唯一あの世に持って行けるものなのじゃ。そして、その成果が高ければ高いほど、人は死の瞬間においても、自分で自分をほめることができるのじゃ。そして、学校教育の位置づけとは、そのための基礎を学ぶことじゃ。そして、その効果とは、社会に広く貢献するための学力や体力が身につく、恩師や友人、後輩と知り合い、そして、彼らに対する感謝や友情を深めることで、愛や善意、責任感が高められるということなのじゃ。これらが、学校教育の効果である。じゃが、そんな難しいことを言っても、子供が理解できるのであるか？と、皆はそう思うであろう。じゃが、

親や教師の真剣な熱意は、子供に伝わるものなのじゃ。初めは、十分理解できなくとも、直感で理解し、そして、成長に伴い、それは真実に変わるのじゃ。まこと、学校教育とは、このようなものではなくてはならないのじゃ。

さて、話は、変わるが、余事象法を、科学的な事柄に応用したらどうなるじゃろうか？例えば、ニュートンの世紀の発見、「ニュートンは、りんごが、木から落ちるのを見て、万有引力を発見した。」という事柄ではどうじゃ。そのようなことは、天才にしかできない離れ業であると、皆は、思うであろう。じゃが、意外にも、そうでもない。余事象法を用いれば、そちも、りんごが落ちるのを見ただけで、万有引力を発見することができるじゃろう。うそのようで、本当の話である。疑うのであれば、例のことく、まず紙の上に十字線を書き、その右下に、「りんごが木から落ちる。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「りんごが木から落ちない。」と書いて下され。そして更に、その左側に、「りんごが木から落ちない」ための十分条件を書いて下され。なんであれば、りんごは木から落ちないのか？一つは、りんごが、下から支えられておる場合じゃ。確かに、下から支えられておれば、りんごは、下に落ちよ

うがない。もう一つは、りんごが、上から吊られている場合じゃ。例えば、網で吊られていては、同じように落ちようがない。では、りんごが落ちないのは、この二つだけじゃろうか？例えば、ボールに力を加えると、ボールは、ころころと転がり始める。そして、止まったボールに力を加えなければ、ボールはいつまでも止まったままでおるはずじゃ。そして、このことは、りんごについても当てはまるはずじゃ。そう、3番目の条件は、「りんごに、力が加わらない。」ということじゃ。即ち、りんごが、木から落ちないための十分条件とは、「りんごが支えられている、または、吊られている、または、力が加わらない。」となるのじゃ。そして、この余事象は、「りんごが支えられていない、かつ、吊られていない、かつ、力が加わる。」となるのじゃ。即ち、りんごは、支えられてもなく、吊られてもなく、力が加わるから下に落ちるのじゃ。では、このりんごに加わる力とは、何であろうか？それが、万有引力なのじゃ(図5参考)。どうじゃ、簡単であるう。これで、皆も、ニュートンと同じになれたということじゃ。では、次に、余事象法で社会問題を解いてみたら、どうなるのであろうか？皆も、承知の通り、最近ではテロの横行する、物騒な世の中である。では、なぜ、テロが起

りんごが支えられている、または吊られている、または力が加わらない。

りんごが木から落ちない。

りんごが支えられていない、かつ吊られていない、かつ力が加わる。

りんごが木から落ちる。

図 5

全人類が利他的である。

テロが起きない。

全人類が利他的ではない。

テロが起きる。

図 6

きるのか？その原因を余事象法で調べてみよう。例のごとく、紙に十字線を引いて、その右下に、「テロが起きる。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「テロが起きない。」と書いて下され。更にその左側に、「テロが起きない」十分条件を書いて下され。なんであれば、テロは起きないのか？皆も、考えてほしい。理想の答えでよいので、書いてほしい。例えば、天国ではどうであろうか？天国では、テロは起きるであろうか？そう、天国ではテロが起きないと考えられる。では、なぜ、天国では、テロが起きないのであるか？それは、天国に住む住人が、皆、自分の利益よりも、他人の利益を優先するからに違いない。つまり、利他的愛に満ちた人々は、自分の主張を、決して相手に押し付けたりはしないものじゃ。常に相手の心の成長を願って行動する。だから、決して、相手を破壊しようなどとは思わないものじゃ。じやから、「テロが起きない」十分条件とは、「全人類が、利他的である。」と、いうことなのじゃ。そして、その余事象は、「全人類が、利他的ではない。」と、いうことになる。即ち、全人類が利他的ではないから、テロが起きるのじゃ。某宗教団体の指導者も、某国の大統領も、利他的とはいえない。全員が利他的でない限り、テロが止むこ



とはないのじゃ。テロの無い世の中になるためには、我々一人ひとりが、利他的に生きる努力をする必要があるのじゃ（図6参考）。

そして、最後に、余事象法を哲学的なことに応用したら、どうなるのであろうか？  
例えば、「世界は、なぜ存在するのか？」という題材はどうじゃろうか？「また、とんでもないことを言い出す。」と、皆は思っておることじゃろう。さて、どんな答えになるのか、さっそく見ていくことにしよう。また、例のごとく、紙に十字線を書いて下され。そして、その右下に、「世界が存在する。」と書いて下され。そして、その上にその余事象、即ち、「世界が存在しない。」を書いて下され。そして、その十分条件を、考えて下され。なんであれば、世界は、絶対に存在しないのか？皆はどう考えるであろうか？話はそれるが、皆も承知のとおり、神は全能である。全能でない神など、想像すら出来ない。では、この神が、もし、世界が存在しないことを希望したら、どうなるであろうか？その場合は、もちろん、世界は、存在しないであろう。じゃが、皆の中には、神など、空想にしか過ぎないと、思っておる者もあるじゃろう。じゃから、神が存在すると仮定して、「世界が存在しない」ための十分条件は、「神が存在し、か

つ、神が世界の存在を希望しない。」となることじやろう。そして、その余象は、「神が存在しない、または、神が世界の存在を希望する。」となるのじや（図7参考）。つまり、世界が存在する理由は、「神が存在しない。」か、「神が存在し、かつ、世界の存在を希望する。」か、の、どちらかということになるのじや。じやが、この2つの世界には、大きな違いがあると考えられる。例えば、神が存在しないで、たまたま生じた世界は、どのような世界であろうか？おそらく、なんの法則もない、無秩序な世界となるか、仮に秩序があるとしても、その世界には、《愛》は、存在しないことじやろう。なぜならば、《神こそ愛の源泉》じやからじや。そして、愛のない世界とは、さつばつとして調和もなく、高度な生物が育つ事もないことじやろう。なぜならば、愛がなければ、親は子供を育てないからじや。

一方、神が存在し、かつ、神が世界の存在を希望して生じた世界は、どのようなものであるか？神は、愛の源泉であるから、こちらの世界は、愛や調和を基本とした世界になることじやろう。我々のこの世界が、どちらの世界であるかは、言うまでもなからう。即ち、「世界は、神が存在し、かつ、その神が、世界の存在を希望している

神が存在し、かつ神が  
世界の存在を希望し  
ない。

世界が存在し  
ない。

神が存在しない、また  
は神が世界の存在を  
希望する。

世界が存在する。

図 7

世界に空腹，老い，病，  
死がなく、かつ我々が  
利己的でない。

世界に、生老病死  
の苦しみが無い。

世界に空腹，老い，病，  
死がある、または我々  
が利己的である。

世界に、生老病死  
の苦しみがある。

図 8

から存在しているのである。」と、わしは考えておる。そして、神は、日夜我々の世界を支えてくれておるのじゃ。この世界に太陽が輝くのは、神のお陰であり、我々がこうして息ができるのも、神のお陰である。我々は、そんな神に、感謝しなければならぬのじゃ。

じゃが、この答えに満足しない者もおることじゃろう。『神が、愛の源泉である』のならば、なぜ、この世界は、こんなに苦しいものなのか?』と。確かに、この世には、生老病死の苦しみがある。では、次に、なぜ、この世界に、生老病死の苦しみがあるのかを、余事象法を用いて考えてみよう。例によって、紙に十字線を引き、その右下に、「世界に、生老病死の苦しみがある。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「世界に、生老病死の苦しみがない。」と書いて下され。更に、その左側に、その十分条件を書いて下され。なんであれば、世界から生老病死の苦しみがなくなくなるのじゃろうか?そのためには、まず、神が、我々から空腹と老いと病(やまい)と死を取り除いてくれることが必要となることじゃろう。じゃが、それだけでは、我々は、生の苦しみから逃れることはできないであろう。そのような恵まれた状態で

あつても、おいしいものが食べたいとか、もつと美しくなりたいとか思うことじやう。人は、欲望を持つ限り、どのような状態においても、決して満足することはできないのじゃ。じゃから、我々が、生の苦しみを乗り越えるためには、己の利己心を捨てる必要があるのじゃ。我々は、利己心を捨ててはじめて、恵まれた状態に満足することができるのじゃ。したがつて、「世界に、生老病死の苦しみが無い」ための十分条件は、「世界に空腹 古い 病 死がなく、かつ、我々が利己的でない。」と、いうことになるのじゃ。そして、その余事象は、「世界に空腹 古い 病 死がある、または、我々が利己的である。」となるのじゃ。即ち、世界に、空腹 古い 病 死があり、または、我々が、利己的であるから、世界には、生老病死の苦しみがあるといふことになるのじゃ(図8参考)。

では、なぜ、この世界に、空腹 古い 病 死があるのであろうか?これを、更に進んで考えてみよう。例によつて、また、十字線を引き、その右下に、「世界に空腹 古い 病 死がある。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「世界に空腹 古い 病 死がない。」と書いて下され。そして、その十分条件を考えて下

され。なんであれば、世界に空腹、老い、病、死がないのか？ここで、空腹や老いや病や死のない世界を想像して下さい。そして、次のように自問して下さい。「私は、そのような世界にいて、はたして、進歩することができるのであろうか？」と。なんの悩みも苦痛もない世界で、人が進歩することは、困難なことである。なぜならば、悩みや苦痛こそが、人に反省を促し、それが進歩の原動力となるからじゃ。即ち、空腹、老い、病、死がない世界とは、進歩のほとんどない世界なのじゃ。よって、そのような世界に我々が住むとしたら、それは、神が、我々の進歩を、もはや望んでいない、と、いうことになる。即ち、「世界に空腹、老い、病、死がない」ための十分条件は、「神が、我々の進歩を望んでいない。」と、いうことになるのじゃ。そして、その余事象は、「神が、我々の進歩を望んでいる。」となる。即ち、神が、我々の進歩を望んでいるから、この世界には、空腹や老いや病や死があるのじゃ(図9参考)。我々は、神の期待に応えねばならない。そして、我々の心が無限に進歩し、利己心が全く無くなり、もはや我々が、空腹や老いや病や死を必要としなくなった時には、我々は、その心のレベルにふさわしい、永遠の世界に住むことになることじゃろう、と、わしは考

神が我々の進歩を  
望んでいない。

世界に空腹，老い，  
病，死がない。

神が我々の進歩を  
望んでいる。

世界に空腹，老  
い，病，死がある。

図 9

えておる。

このように、余事象法とは、今までに解けないような難問に答えを与えてくれる、素晴らしい思考方法である。わしは、この余事象法(SBC: Solution By Complementary Basis)を、知人のエンジニアより教わった。皆も、仕事や家庭の難問解決に役立てて下され。

じゃが、このように素晴らしい余事象法にも欠点はある。一つは、十分条件を思いつくまでに時間がかかるということじゃ。簡単な問題なら数分で解けるが、難しい問題となると、何ヶ月も考え続ける場合がある。このようなときは、わしは、いつも、「うとつとと考える」ことにしておる。うとつととすることによって、意識の力が弱まり、無意識のアイデアを捕らえやすくなるからじゃ。

もう一つは、余事象法では解けない問題があるということじゃ。例えば、「貧乏である。」という、あいまいな問題は解くことができない。それは、問題があやふやである、その余事象もあやふやとなり、結局は、その十分条件もあやふやになってしまうからじゃ。この様な場合は、問題を具体的にすることがコツじゃ。例えば、「貧乏であ



る。「とする代わりに、「預金残高が百万円未満である。」等と、具体的に問題を設定することが大事じゃ。また、相手と競合する問題も解くことができない。例えば、「試合に勝てない。」「ことが問題であったとすると、その余事象は、「試合に勝てる。」となるが、もし、「試合に勝てる」十分条件が存在するのならば、相手も同じ事をすれば双方勝つことになり、矛盾することになってしまっからじゃ。

## 付録二、 天使通信について

天使通信とは、何か？天使通信とは、天の靈より助言を頂く方法である。この様に言うと、何やら怪しげに感じる者もあることじやろうが、特に怪しいことをする訳ではない。

方法は、いたって簡単じゃ。

- 1) まず紙と鉛筆を用意する。ブラインド・タッチのできる者は、ワープロやパソコンでもOKじゃ。
- 2) 質問内容を、紙に書く。
- 3) 目を軽く閉じて、うとうとする。
- 4) 頭に思いついた事を、すばやく、素直に書く。

ただ、これだけのことじゃ。人には誰にでも、自分を導いてくれる守護霊が一人以上いると言われておる。もし、それが、本当の話であるのならば、守護霊はいつも、自分のそばにいて、我々にアドバイスを与えてくれようとしておるはずじゃ。そこで、試しに、天使通信を思いつき、実践してみたわけじゃ。実際にやってみると、その助言の適正さは、驚くほどじゃ。皆も悩んだときには、やってみてはどうじゃ。ここでモコツは、《うとうとととする》《ことじゃ。うとうととすることによって、無意識のイメージが捕まえやすくなるのじゃ。参考までに、わしの知人のS氏の例を載せておこう。もちろん本人の了解は、もううておる。

天使通信の例 (S 氏の場合)

彼女に対する私の愛は、偽りの愛でしょうか？

違います。彼女に対する愛は、本物の愛です。

私の愛は、彼女を幸せにするのでしょうか？

愛されるものは、愛に満ちます。愛の中で彼女は輝く事でしょう。

彼女と結婚するとして、私は彼女を幸せに出来るのでしょうか？

幸せはいつも内面にあります。結婚するというよりも愛する事で人は幸せになるものです。

## 付録三、加重評価表について

人は、しばしば岐路に立ち、選択を迫られる。このような場合、どうすれば間違いない選択をすることができるのじゃろうか？ひとつ言えることは、どのような場合にも、善意に基づく選択には誤りがないということじゃ。じゃが、善意が拮抗して、自分の中でどちらを選択してよいか、判断がつかない場合はどうするのか？このような場合に、良き判断を与えてくれるのが、加重評価表と呼ばれるものじゃ。

では、加重評価表とは、いったいどのようなものであるのか？平たく言えば、当事者のメリット、デメリットを合計して比較するものじゃ。では、次に、その具体的な方法を見ていくことにしよう。

まず、加重評価表とは、「Aをするか否か？」の二者択一の問題を解くものである。

用意するものは、紙と鉛筆と電卓じゃ。表計算ソフトがあれば、なおさら良い。そして、最初に選択枝(「Aをするか否か?」)を決める。次に、「Aをする」事に対して、その善し悪し(：メリットとデメリット)を、対象者ごとに、理由を書いて評価する。評価得点は、メリットの場合は、0点から10点まで、デメリットの場合は、0点から-10点までとする。更に、その得点に、0から10までの重みを掛ける。そして、それらを合計して、「Aをする」事に対する総合得点とするのじゃ。次に、同じことを、「Aをしない」事に対して行なう。そして、最後に、「Aをする」場合と「Aをしない」場合の総合得点どうしを比較し、善し悪しを判断するのじゃ。もちろん、得点の多い方が採用すべき案となる。

「ここで注意すべき点としては、対象者に、「神」と「無限のチェーン」と「不動のプライド」を加えておくという点じゃ。対象者に、この三者を加えることで、我々は、多角的な視野で、物事を見ることができるようになる。じゃが、「神」や「無限のチェーン」や「不動のプライド」の視点で、メリットとデメリットを評価せよ、と言われても、おそらく、そちは、困るであろう。じゃから、「ここでは、「神は、利他的である

ことを喜び」「無限のチエーンは、人類の繁栄を喜び」「不動のプライドは、そちが、忍耐や歓喜を堪能することを喜び」者であると考えて、評価して下さい。また、重みは、「相手：5」「関係者：3」「神：10」「無限のチエーン：7」「不動のプライド：3」を目安として下され。そして、評価表には自分に対する評価を加えないようにするのも、重要なポイントじゃ。自分に対する評価を書き加えると、どうしても利己的なものになってしまう。じゃから、普段は、加重評価表には、自分の気持ちは書かないようにしておくのじゃ。ただし、労働などで身体を酷使する場合や、全く身体を使わない場合等には、自分の身体に対する評価を、入れておくべきじゃ。

加重評価表

案件： プレゼントをする。

総合得点： 130点

メリット				デメリット				
対象者	理由	評点 (0~10)	重み (0~10)	合計	理由	評点 (-10~0)	重み (0~10)	合計
彼女	嬉しい。	8	5	40	驚く。	-5	5	-25
			5	0	恥ずかしい。	-5	5	-25
			5	0	ばつが悪い。	-4	5	-20
神	嬉しい。	8	10	80			10	0
			10	0			10	0
			10	0			10	0
無限のチェーン	嬉しい。	8	7	56			7	0
			7	0			7	0
			7	0			7	0
不動産のブライド	歡喜を堪能できる。	8	3	24			3	0
			3	0			3	0
			3	0			3	0
			合計	200			合計	-70



加重評価表

案件： プレゼントをしない。

総合得点： -58点

対象者	理由	メリット			デメリット		
		評点 (0~10)	重み (0~10)	合計	評点 (-10~0)	重み (0~10)	合計
彼女			5	0		5	-25
			5	0		5	0
			5	0		5	0
神			10	0		10	-10
			10	0		10	0
			10	0		10	0
無限のチェーン			7	0		7	-14
			7	0		7	0
			7	0		7	0
不動のフライド			3	0		3	-9
			3	0		3	0
			3	0		3	0
合計				0			-58

## 総合判定

案件	総合得点
プレゼントをする。	130
プレゼントしない。	-58

## 付録四、自己レベル・チェックシートについて

心の進歩を考える上で、現在の心のレベルを知ることが、とても重要なことじゃ。人は、己の心のレベルに無頓着であれば、知らず知らずのうちに、心のレベルを落としてしまうじゃろう。じゃが、現在の心のレベルが分かっておれば、それを基に、対策を立てて、そこから立ち直ることもできるのじゃ。そこで、皆に、わしの作った「自己レベル・チェックシート」を紹介しよう。使い方は、いたって簡単じゃ。皆も試して下され。

まず、1から4までの4つの質問に答える。例えば、問い1は、「あなたは、どれくらい愛しますか？」と問うので、指標を参考に回答するのじゃ。例えば、自分を省みない人は2点、自分と他人をそこそこ愛する人は5点、というあんばいじゃ。得点が、

小数点でもOKじゃ。そして、4つの質問に答えたら、各質問に重みを掛けて合計するのじゃ。問い1の重みは4点、それ以外は2点じゃ。合計点が、98点以上なら、合格じゃ。それ未満は、まだまだじゃな。

### 自己レベルチェックシート(問1)

あなたは、どのくらい愛しますか？

指標

全てを愛する。	10
全生命を愛する。	9
全人類を愛する。	8
	7
自分と他人を愛する。	6
	5
自分を愛する。	4
	3
自分を愛さない。	2
	1
まったく愛さない。	0

貴方の自己採点は？ =>  点 =A

自己レベルチェックシート(問2)

あなたは、どのくらい自己を高めようと努力していますか？

指標

常に努力している。	10
	9
	8
大抵、努力している。	7
	6
	5
時々努力している。	4
	3
	2
まったく努力しない。	1
	0

点

貴方の自己採点は？ =>  点 =B

自己レベルチェックシート(問3)

あなたは、どのくらい恨み,妬み,怒りを感じますか？

指標

全く感じない。	10
	9
ほとんど感じない。	8
	7
	6
	5
時々、感じる。	4
	3
	2
いつも感じている。	1
	0

貴方の自己採点は？ =>  点 =C

自己レベルチェックシート(問4)

あなたは、どのくらい生・老・病・死を嫌に思いますか？

指標

全く嫌に思わない。	10
	9
	8
	7
死を嫌に思う。	6
	5
病・死を嫌に思う。	4
	3
老・病・死を嫌に思う。	2
	1
生・老・病・死を嫌に思う。	0

点

貴方の自己採点は？ =>  点 =D



自己レベルチェックシート (評価結果)

貴方の、自己レベルは? = >

$$A\text{の得点} \times 4 = \boxed{\phantom{00}} \text{点}$$

$$B\text{の得点} \times 2 = \boxed{\phantom{00}} \text{点}$$

$$C\text{の得点} \times 2 = \boxed{\phantom{00}} \text{点}$$

$$D\text{の得点} \times 2 = \boxed{\phantom{00}} \text{点}$$

---

$$\text{合計:} = \boxed{\phantom{00}} \text{点}$$

付録五、人間の構造について

最後に、わしの思う人間の構造を次に示そう。

人は、様々な要素を内包し、社会に向けて貢献してゆく。  
まこと、人とは、美しい。

神

愛

善意

無限のチェーン

不動のプライド

誠実      知識      創造性

社会貢献

おわりに

ああ、世界が幸せでありますように。

了